

307

皇軍は進む

(北支事變史)

特 240

305



始



北支事變は何故に起つたか、否、起らざるをえなかつたか？これに對する解答は本書の目的ではない。しかしながらこゝに收むる事變經過が示す如く、蘆溝橋事件の發生以來、我が國が隱忍自重しつつその不擴大に努力して來たかは、むしろ必要以上に度を過しはせぬかと思はれるほど慎重な態度をとつて來たのである。しかるに支那側の重なる暴戾、背信、不遜極まる行動はつひに皇軍をして驟然起つた余儀なきに至らしめ、今や膺懲の鐵槌は斷乎として彼れの頭上に下つたのである。

皇軍一たび起つや、疾風枯葉を捲くが如くたちまちにして平津一帯の地から二十九軍を掃滅し、さらに進んで雲霞の如き中央軍と相對峙する事になつたのだ！かくて事變は今後いかに發展するか、みだりに豫測は許されぬにしても、正義に凝つた愛國的熱血は鐵火と燃えつつ、東洋永遠の平和確立へたゞひたむきに進むのみが残された唯一の途なのである。

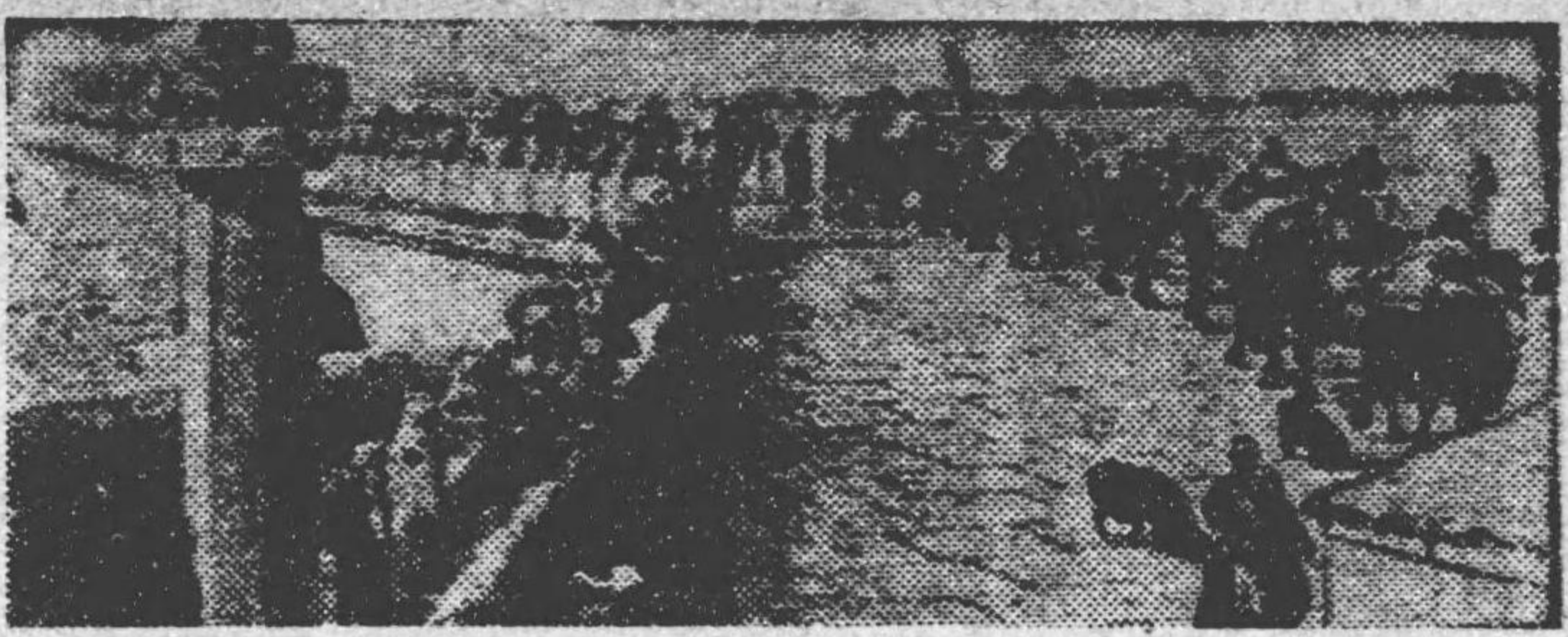
おゝ 皇軍は進む！堂々たるその威風を本書に見よ！



主要目次

盧溝橋事件(北支事變の發端)..... 1
 わが陸軍の對策..... 2
 我陸軍自衛伏意を宣明..... 3
 臨時閣議開かる..... 4
 飽くなき支那軍の挑戦..... 5
 冀察側との現地協定成る..... 5
 關津派兵の方針を決定す..... 6
 協定を無視した支那軍の不信行爲..... 7
 冀察側解決便法を提示..... 9
 我自衛權の發動愈上迫る..... 11
 陸軍省一部派兵を發表す..... 11
 國民政府に狼狽の色..... 11
 北支移動の中央軍三十師..... 12
 田代副司令官逝く..... 13
 大城戸武官の重大通告..... 14
 わが最後の通告發表せらる..... 15
 宋哲元司令官に陳謝..... 16
 外交部暫くまで現地解決を拒否し來る..... 16
 廿日以後自衛權發動を聲明..... 18
 關津自衛的措置に決定..... 19
 瀋陽なる皇軍の激怒的反響..... 20
 宋から撤退を報告..... 21
 三十七師の一部撤退..... 21
 陸軍省現地協定成立を發表..... 21

支那軍撤退中止、形勢逆轉..... 24
 鄭坊驛の激戦..... 25
 車變後最初の爆撃..... 25
 軍司令部最後通牒を發表す..... 25
 北平廣安門でわが軍を挾撃..... 26
 新平、自衛權發動を表明す..... 26
 我軍通州を爆撃..... 27
 隋窓の火蓋つひに切らる..... 28
 天津の市街戦..... 30
 平津地帯敵軍の掃蕩成る..... 32
 通州保安隊の叛亂..... 32
 天津市内殘兵に爆撃實行..... 34
 西沽、大沽を上頭..... 34
 河邊部隊長辛店上頭..... 35
 我飛行機隊保定爆撃..... 36
 國民政府抗日軍事の大權を蔣介石に一任..... 37
 天津の掃蕩成り、通州を確保..... 37
 劉汝明の態度急變、濟南の動向..... 39
 南口方面の敵軍裝甲車爆撃..... 41
 事變以來日支兩軍の損害數..... 42
 南京政府部内に軟論漸く流傳..... 42
 蔣介石、白雲騎南巨額の妥協..... 43
 北支明細化の曙光現はる..... 43
 兩京防衛會議開幕と自軍の兩論對立..... 44
 漢口も激震..... 44
 通州兵變の爆撃(陸相の報告官記者)..... 45



盧溝橋

蘆溝橋事件 北支事變の發端

七月七日

北平郊外蘆溝橋北方一千メートルの地點龍王廟駐屯の支那軍馬治安隊下第廿九連隊七連に屬する二個中隊は七日午後十一時ごろ折衝夜間演習中のわが駐屯一部隊に不法にも發砲、事態は重大化して八日拂曉兩軍はつひに戦闘を開始するに至つた。これよりわが支那側部隊は自軍の態度を待してゐたわが部隊に迫撃砲、歩兵砲、機關銃、小銃等を雨あられと打ち出したのでわが方もつひに自衛上やむなくこれに應戦、彼我猛烈なる戦闘を開始するに至つたのであるが支那側は頑強に抵抗を續け、八日午前六時半ごろ最も激戦を極めつひにわが方に死傷數名を出した。しかし勇猛果敢なる我部隊は銃火の下を潜つて漸次敵陣に肉薄しこれを擊退して龍王廟を占據したのであつた。これが今次事變の發端なのである。

遂に龍王廟を占據 誠意なき支那側の態度

七月八日

蘆溝橋兵營附近の時間には支那側の停戦申出でによつて一時停戦に決した。而してその停戦は八日午前十一時を期限とするもので、それまでに支那軍が蘆溝橋一帯の地區から撤退する事を約して、もしそれまでに撤退せぬ時は斷乎、膺懲するといふ條件が付せられてゐるのである。しかるに右期限を過ぐるも支那側から何らの回答に接せず、わが方は事件不擴大の理前からさらに正午まで右期限を延期する事となり支那側の態度を監視してゐる。しかし支那側にして依然然然策を弄するにおいては断然断絶するの決意をなすに至つた。

▲北平陸軍武官午前七時發表—駐台駐屯のわが部隊は七日午後十時ごろ夜間演習中蘆溝橋北方一

千メートル龍王廟付近において何故かかねて同地付近に砲壘を設け守備を配置し居りたる支那軍より理不盡なる射撃を受けたるを以て直ちに砲壘を中止し部隊を集結してこれを監視した。一方北平部隊 森田中佐は宛平縣長王治齋および 外交委員代表と共に現場に急行支那軍の反省を促さんため午前五時ごろ現場に到着せり、然るにこれよりさき龍王廟の専員林耕宇が居りたるを以てこれを同行して瀾溝橋に赴き現地調査の上支那側の不法を糾弾反省を促したるが、付近の支那軍は長辛店付近より砲兵を交へたる増援隊を得て集結中のわが部隊に對し射撃を加へ挑戦し來りたるを以てわが軍は自衛上やむなく應戦したり。時に午前五時半ごろ、爾來戦闘中なり。本戦闘において膠内推討は名譽の戦死を遂げ、野地伊七少尉負傷したる外下士官兵十數名の死傷あるものゝ如し。

▲陸軍司令部午前八時半發表——瀾溝橋事件に對し龍王廟の射撃に對し嚴重なる交渉を開始せんとするや、龍王廟にありたる支那軍は八日午前五時半ごろ不法にも再び射撃を開始せるを以てわが軍は直ちにこれに應戦して擊退し龍王廟を占據せり。なほ瀾溝橋の支那軍に對しては目下武裝解除中なり。軍は支那のこの不當なる背信行為に對しては斷乎その反省を促すところあらんとす。

▲陸軍省警備——瀾溝橋事件その後の進展に關し陸軍省に八日夜左の如き報告が到着した。
瀾溝橋付近にある支那軍はわが武裝解除の要求に應ぜず敵對行為に出でつゝありまた永定河西岸高地には逐次支那軍増加しつゝあり現在までに知り得たる損害はわが方戦死二名、負傷十四名、支那軍の遺棄せる死體百名。

▲午後七時十分外務省警備公署——寺平大尉と桑德純北平市長との交渉の結果は支那側に何ら誠意なく交渉は決裂に瀕し午後三時前線では再び交戦に入つた。

▲同九時三十分警備——午後八時より北平に臨時戒嚴令が布告された。寺平、桑市長交渉は未だ全然決裂とまでは行かず一縷の望みを存する。但し前線では交戦状態かつつけられてゐる模様。

わが陸海軍の對策 わが陸軍中央部では北支の事態に鑑みこの日深更京都以西〇個師團に對し七月十日餘隊の豫定にある除隊兵の除隊を延期すべき旨警備部副團長宛てそれ〴〵緊急命令を發した。また海軍に於ても各方面の情報並びに公電に基き米内海相以下警備部に對策を講ずると共に特に第三艦隊司令官長谷川清中将に對し警備の万全を期すべき旨の訓電を發した。

我陸軍當局決意を宣明

七月九日

陸軍省では本事件の重大性にかんがみ午前一時二十分左の如く發表し帝國の決意を宣明した。今次事件の原因は全く支那側の不法行為に基くものであつて軍は事件勃發當時より不擴大の方針を堅持し事件の圓滿なる解決を希望して來たのである。しかるに支那側が依然その非違を改めず挑戰的行動に出で事件の解決を遷延しつゝあることは最も遺憾とするところであるが、今において改むるところあらばわれもまたこれに應ずるに吝かでない。しかしながら支那側にして反省するところなく不幸事件の擴大を招來するが如き事態を惹起するに立ち至らば、われもまたやむを得ず相當の決心をとらねばならない。しかしてその責は一に支那側に存するものである。

松井、張允榮の協定

瀾溝橋事件に關する日支交渉はこの日午前一時松井特務機關長、張允榮冀察側代表會見の結果午前五時を期して日支兩軍とも一齊に撤退する旨の協定に到達し、事態はこゝに解決するものと豫想されたのである。然るに期限に至るも支那側は右協定を實行せざるのみか、永定河左岸に撤去中のわが軍に射撃を加ふるの暴舉に出たためわが方もやむなくこれに應戦、再び戦端を開くに至り又また事態を憂慮されたが、支那側も前線部隊に命令の徹底を期した結果漸く平靜に歸するに至つた。かくて北平市長桑德純は午前七時使者を松井特務機關長の下に派し非公式に遺憾の意を表したのである。但しわが方は支那軍屢次の不信行為に對し嚴重監視の態度を待してゐる。

▲陸軍司令部午前八時半發表——昨日第九軍首腦部は我が要求を容れ九日午前五時を期し瀾溝橋の支那部隊を永定河右岸に撤退することを協約せしに拘らず同時に至るも支那側は毫も撤退する模様なくかへつて我軍に對し射撃を開始せるをもつて我軍は已むなくこれに應戦して支那側の射撃を沈黙せしめた。二、軍の嚴重なる抗議により支那側は周參謀長を車使として本日午前五時四十分北平發同七時瀾溝橋到着、該地支那部隊の撤退を更に督促せしめ軍はその成果を監視中なり

臨時閣議開かる

事件の重大性に對應すべく政府は午前八時五十分臨時閣議を開いた結果左の如き方針を決定した

(一) 今次事件の原因は全く支那側の不法行為にもとづくこと (二) わが方としては事件不擴大の方針を堅持すること (三) 支那側の要求により事態の円滑收拾を希望すること (四) もしも支那側に反省なく要請すべき事態を招来する危機を見るに至らばわが方としては速切迅速に機宜の處置を講ずること (五) 各關係は何時にても臨時閣議の招集に應じ得るやう待機すること
我南京大使館日高参事官はこの日午後四時半外交部に陳次長を訪問支那側の責任を追及して抗日取締を要求せるに對し陳次長は強硬的態度を示した。

飽くなき支那軍の挑戦 我軍龍王 廟を夜襲

七月十日

溝溝附近の日支兩軍は九日正午以來一切の戰行を停止するとの協定の下に北平において交渉進行中にもかかわらず、百余名の支那軍は十日午後五時十分溝溝北四キロの龍門口付近から迫撃砲を交へつゝわが部隊を攻撃して来たので、わが軍も應戦してこれを撃退した。しかるに午後七時に至るや新たな支那部隊が再びわが方に挑戦し來り、また永定河右岸からも迫撃砲をもつてわが軍を射撃しはじめたのでこれに應戦し、午後九時十五分ついに龍王廟の敵陣に夜襲してこれを占領しさらに東辛莊をも占領した。かくの如く支那軍の飽くなき不信不誠意によつてわが方の不擴大方針も水泡に歸せんとし、形勢また又逆轉を許さぬ状態となつたのである。

蔣介石空軍に出動命令

午後十一時陸軍省公電によれば蔣介石は四個師を石家莊附近に北上するやう命令を發すると共に全飛行隊に對して出動命令を發したとの事である。この日軍政部長何應欽は重慶から急電南京に歸つた。

國民政府の逆捻的抗議

わが日高参事官は本省の訓令に基き午前十一時南京政府外交部に王龍恩外交部長を訪問、帝國政府の確固たる方針を傳へると共に抗日毎日の取締りに對して嚴重な警告を發し且つ今次事件に對する誠意ある解決を要求した。これに對し王部長は強硬的態度を示して會員は物別れとなつたのみならず、同日午後七時文書を以て日本側の謝罪、損害賠償、今後之の保障等を要求する抗議をわが大使館に提出して來た。

冀察側との現地協定成る

七月十一日

前線における日支兩軍の對峙をよそに北平においては秦德純市長、河北省主席兼第三十七師長馮治安、天津市長兼第三十八師長張自忠ら冀察側首腦部と橋本支那駐屯軍參謀長以下わが當局との間に現地の事態收拾に關する交渉が行はれ十日午後五時から繼續に二十時間、幾度か決裂の危機に瀕しながら十一日午後一時に至つて冀察側は漸くわが最小限度の要求三ヶ條を承認し、こゝに現地に關するかぎり解決の曙光を見るに至つた。條件の骨子としてはまづ溝溝橋一帶の支那軍撤退、今次事變後移動せる部隊の原駐地引揚げなどが擧げられ、支那側は午後一時半から撤兵を開始したが、わが方としては支那側從來の慣用手段にかんがみ嚴重に條件の履行を監視する體勢をとつてゐる。なほ松井特務機關長は午後五時冀察側代表張允榮と會見午後九時まで會談した結果、前回の紳士の申合せがその効力を發揮しえなかつた事實にかんがみ文書による協定の形式をとる事になつたのである。

廟議、派兵の方針を決定す

帝國政府はこの日午前十時半首相官邸に五相會議を開き北支派兵を決定すると共に我權益と居留民保護に斷乎適切の方法をとる旨を申合せ、午後二時からさらに閣議を開いてこゝに廟議決定。午後六時三十五分左の如く中外に聲明した。

帝國政府の聲明

相次ぐ支那側の毎日行爲に對し支那駐屯軍は強忍靜觀中の處從來われと提携して北支の治安に任じありし第二十九軍の七月七日夜半溝溝附近における不法射撃に端を發し該軍と衝突のやむなきに至れるために平津方面の情勢逼迫し我が在留民はまさに危殆に瀕するに至りしも、我が方は和平解決の望を捨てず、事件不擴大の方針に基き局地的解決に努力し一旦第二十九軍側において和平的解決を承認したるに拘らず、突如七月十日夜に至り彼は不法にも更に我を攻撃し再び我軍に相當の死傷を生ずるに至らしめしかも頻りに第一線に兵力を増加し更に西苑の部隊を南進せしめ中央軍に出動を命ずるなど武力的準備を進むると共に和平的交渉に應ずるの誠意なく、遂に北平における交渉を全面的に拒否するに至れり、以上の事實に鑑み今次事變は全く支那側の計画的武力抗日

なる事最早疑ひの余地なく惟ふに北支治安の維持が帝國及び滿洲國にとり緊急の事たるは茲に贅言を要せざるところにして、支那側が不法行為は勿論排日侮日行為に對する謝罪をなし及び今後かゝる行為ならしむるための適當なる保證等をなす事は東亞の平和維持上極めて緊要なり、依つて政府は本日の開議に於て重大決意をなし、北支派兵に關し政府として執るべき所要の措置をなす事に決せり、然れども東亞平和の維持は帝國の常に願念する所なるを以て政府は今後とも局面不擴大のため平和的折衝の望みを捨てず、支那側の速かなる反省によりて事態の円満なる解決を希望しまた列國權益の保全については十分これを考慮せんとするものなり。

駐屯軍司令官更迭 田代支那駐屯軍司令官病氣入院中のため教育總監部本部長香月清司中將が支那駐屯軍司令官に轉補された▲冀察政務委員會委員長安部元は山東省樂陵から保定に到着、十二日北平歸任の豫定。

協定を無視した支那軍の不信行為

七月十二日 午後一時陸軍省に達した現地からの報告によると、我軍は十一日夜支那側との申合せにより所定の位置に撤退したところ支那軍の態度は俄然變化を示し、わが方に對して逐次攻撃前進の體勢をとりその第一線部隊はわれに向つて射撃を開始した。かくて本日午前十一時事態は支那側の不信行為によりまたもや急迫するに至つたので我が駐屯軍當局は重大決意をなすに至つた。

▲午前九時陸軍省警報—瀋陽橋附近の支那兵はその警戒線の一部を昨十日夜の線より前進せしめまたその裝甲列車は長辛店に到着しあるが如し。

▲午前十一時二十分陸軍省發表—十二日午前十時四十分着電によれば八寶山附近の支那軍は従来の位置を捨てわが軍に向ひ前進せり。

國民政府外交部に警告 わが日高參事官はこの日午前十時大使館に中原、大城戸兩武官の來訪を求め本省の重大訓令にもとづいて協議の結果同十一時三氏同道で外交部を訪問し外交部長と會見した。日高參事官は今時事變に對する帝國政府の重大決意を告げ支那側の不信行為に最後の警告を與へると共に支那の抗日政策の全面的改變その他諸案件の解決促進について猛省を促した。右會見後同日午後八時外交部長は重道經日本科長をわが大使館に派し文書を以て「日本對冀察の約款は中央の容認を得ざれば承認しえず、

よつてすべての地方的取きめは中央の承認を求められたい」旨を通告して來た。

蔣介石抗戰準備を整ふ

■山の蔣介石は王外交部長から日高參事官の與へたわが最後の警告を受けし諸情報を綜合して日支關係はいよいよ最悪の場面に到達したとの結論に達したものの如く、軍政最高首腦部その他の要人を招致して重大協議をなしたがその結果

- 一、抗日抗戰の全般的準備を進め特に平漢、津浦兩鐵路當局に軍用列車の調達配置を命ずる
 - 一、中央軍主力部隊を兩鐵路沿線に集中し、西北共產軍及び江西軍等反中央軍勢力との連絡を緊密にし團結の實を擧げる
 - 一、陝西、河南、湖北、安徽、江蘇駐屯の直系軍及び準直系軍に對し廣汎なる動員令を下し鄭州を中心とする關海、平漢兩沿線にこれら各部隊の集結を命ずる
- その他の軍事的諸項目を決定した模様である。宋哲元は本日天津に到着した、また駐日大使許世英は辭意を取消し速かに歸任する事に決定した。

七月十三日

▲午後三時半駐屯軍司令部發表—本日午前十一時ころ馬村(北平の南方一キロ)を我軍の小部隊が自動車にて通過中突如支那部隊より小銃機關銃の射撃を受け我軍は直ちにこれに應戰撤退す。わが軍戦死者三名、支那側に相當死傷者ある見込み。この日の北平電報は豐台から某地向はんとした日本軍を支那軍が阻止せんとして衝突激戦中であると傳へ、また午前十一時半ころ北平のはるか南方から銃砲聲がしきりに城内に聞えて來たと報じてゐる。

冀察側解決便法を提示

政府はこの日の閣議席上において今次事變の重大性にかんがみ廣田外相、杉山總相、米内海相、馬場内相、賀屋藏相、吉野商相らより各般の情勢を



前線視察の杉山本社特派員

報告した後一先般の閣議で決定したる方針をあくまで堅持しながら万般遺憾なき用意の下に事態の推移を監視する」との旨合せをなし我が方の既定方針をあくまで堅持する事を決定した。なほ陸軍省では左の如き發表をなしてわが態度を明らかにした。

▲午後一時半陸軍省發表——七月十一日午後八時支那側第二十九軍師長張自忠、張允榮は蘆溝橋事件現地解決便法として左記條件に署名の上これをわが北平特務機關長松井大佐に手交した。わが方は依然然事不擴大方針を保持し十分の準備を整へつゝ支那側の實行を監視中である。しかしながらその後においても支那軍のわが警戒部隊に對する射撃ならびに蘆溝橋部落に對する侵入その他挑戰的行爲の類を見つゝあるは頗る遺憾とするところである。かくの如くして事態がさらに擴大するに至る事あるもその責任は實に支那側の負ふべき事は明らかである。

蘆溝橋事件解決條件の概要 一、支那軍は蘆溝橋城廓及び西門に駐屯せず該地の治安は保安隊をもつて維持す。

一、第二十九軍隊長の陳謝、責任者の認罪、將來の保障をなす外本軍變を誘發せし賊衣社、共產黨その他抗日各種團體に對し適切なる對策及び取締りをなす。

中央軍續々北上 蔣介石對日 作戰を練る

南京國民政府はいよ／＼對日抗戰の決意を固め通信交通機關の戰時國家動員を斷行するに決し蔣介石の命を受けてそれ／＼各機關に内命を發したが津浦、平漢兩鐵道は完全に軍用鐵道化し中央軍は刻々緊迫の度を加へる北支に出動しつゝあり。万福麟軍の一部は戰車、裝甲車隊を先頭として十三日すでに長辛店に到着、對峙の率ゐる第二路軍も續々河北省境を望んで進出する。かくて中央軍の北上に力を得た第二十九軍は次第に對日抗戰の態度を明らかにし殊に最初から抗日の氣勢盛んな馮治安麾下の部隊は早くも北平西方に集結して戰鬪形を整へるに至つた。一方蔣介石は對日作戰計畫として左の如き方策を練つてゐると傳へられる。すなはち

一、かねて相當堅固なるトーチカ陣地を構築しつゝある保定線第一期作戰の據點としその前面に展開する直隸平野で日本軍と一大決戦を交へる。

一、保定の線が突破された場合には第二兩戰線として逐次黃河の南岸に退き黃河の流水を挾んで持久戦に入り、一方便衣隊によるゲリラ戰法によつて戰線に後方を擾亂し日本軍をして奔命に疲らしめ遂を以て勞を待つゝの作戰に出づ

といふのであるが、さらに北平からの情報によると蔣介石は前後何應欽を中心に軍事秘密會議を開いた結果直系ならびに傍系中央軍に動員令を下し場合によつては作戰本部を洛陽に移す決意の如くすでに飛行機三四十台は同地に到着したといはれる。

加藤書記官冀察に警告 北平大使館加藤書記官はこの日午後四時半北平市長兼總領事を訪ひ本省の訓令に基き今次の事態に關し冀察兩省が誠意をもつて速に解決につくされたことの希望を述べ會談二時間に及んだ▲なほ事件勃發と共に上海から青島に入つた川越大使は南京行きの際定を變更飛行機で天津に向ふ事となつた。

我自衛權の發動愈よ迫る

七月十四日

現地和平解決に對する支那側の要約は二十九軍幹部の優柔不斷と部内不統制とによりつひに一片の反古と化した。せんとし、加ふるに中央軍の大舉北上により梅津・何應欽協定は完全に無視される形勢にあり、終始隱忍自重しつゝ事件の不擴大をもつて臨み來つたわが方の懸念も最早やその限度に達し、たとひ第二十九軍との和平成るも中央軍の約定踐踏によつてわが北支駐屯軍の自衛權發動は一刻の遲延も許されぬ情勢となり風雲ますます急を告ぐるに至つた。すなはち我方としては十一日夜の約定實行を嚴重監視してゐるが支那側は全く誠意を示さず、しば／＼背信行爲をくり返すのでこの上は實行期限を付して最後の通告をなすべく決意しつゝ支那軍があくまで挑戰的態度に出るか、中央軍が北支に進駐して來た場合にはその時こそ斷乎たる處置をとる事となつたのである。

又また我軍を射撃 わが連絡兵六名は午後四時ごろ通州から豊台に向ふ途中馬村の南方約八キロ團河付近にさしかゝるや突如支那軍より射撃を受けわが方戦死一、負傷一を出した。

中央軍の北上活潑 蔣介石の命令によつて中央軍の北上はますます活潑となり龐炳勳、劉峙軍は續々進出して十

四日前衛部隊は四十個列車に滿載され石家莊を通過して保定に向つたが、さらに蔣介石から南支防備の全權を委託された廣東綏靖主任余漢謀は十四日福建省漳州において福建西南部に轉進する共産軍の首領張鼎勳、鄧衣快と會見の結果これを第五十七師に編入し台灣に對する抗戰準備を命じたとの事である。

樞府、政府を激勵す

帝國政府は北支事變の重大性にかんがみこの日樞密院定例本會議後特に顧問官全部の居残り求め陸、海、外、蔵の四相も出席して事變の原因經過ならびに政府の方針等を報告して諒解を求めた。席上各顧問官から「時局は頗る重大である、もちろん不擴大方針を進むことは希望するところであるが帝國としてはこの際根本的解決を圖り東亞永遠の平和を確立するため斷乎たる決意をもつて臨まれない」との意見を陳列して政府を激勵した。なほこの日政府は時局重大なりとして連日閣議を開く事を申合せた。

交渉を天津に移す

今次事變の交渉は北平で行はれて来たが宋哲元の希望もあり日支兩當局最高首腦のゐる天津に移す事となつた。これがため冀察政務委員齊燮元は午前十時發張自忠と共に午後零時半着列車で天津に到着、宋哲元は齊燮元、張自忠より事件の真相ならびに交渉經過を聴取の上十一日の松井、張允榮申合せを基礎に香月司令官との間に本格的交渉を進める事となる。一方北平では張德純、張允榮と松井機關長との間に側面折衝をなす事となつた、この日川越大使は天津に着く。

七月十五日

▲午前九時三十分陸軍省發表—○諸情報綜合するに支那側は永定河左岸における兵力を撤退せざるのみか却つて兵力を増大し工事を増強しつゝある状況にある。即ち北平南側平漢線に沿ふ線を第一線としその後方數線により北送されてゐるが、十四日平漢線上にあるもの四五十列車を下らぬ模様である。○平漢線を北上中の支那軍は多く夜間隱行により買筋への入報によれば蔣介石は二十九軍將領に對し劉峙を總指揮とし直系六個師を北上させる用意ある旨打電すると共に、右中央軍はすでに河南省南部信陽、湖北省麻城より出動を開始したといはれる。

陸軍省一部派兵を發表す

▲午前八時十分陸軍省發表—北支の現勢に鑑み本十五日内地より一部の部隊を派遣する事に決せらる

國民政府に狼狽の色

わが外交機關を通じて支那側に最後の警告を促すためわが方は引續き和平的努力を重ねつゝあるが支那側は今なほわが方の決意を輕んじ、誠意を諒解せず言を左右に託していつらに時日を遷延、しかも支那側現地官憲の責任を止まるところを知らざる有様なので大勢は一日と惡化し遂に日支全面的衝突の危地に突入しつゝある。しかして中央側は宋哲元の責任中央轉嫁策に煩はされて中央と北支との聯絡十分ならず、且つ現地情勢の十分なる認識を有せず且つ日本側決意の程度打診にも一定の結論に達せず、その結果事應解決の具體的方策に乗り出せない有様であるが、今夕陸軍省から發表された日本軍一部派兵の報を入れて極度に狼狽の色あり、和戦いづれを執るかこゝろ三日中に眞の肚を決すべく余蘊なくされた模様である。

英大使支那に勸告

この日北戴河の避暑地先きから南京に歸つた英大使ヒューゲッセン氏は午後四時半外交部長を訪ひ本國政府の訓令に基いて對日約定の履行を勸告すると共に、わが日高參事官に對しても事件の不擴大について希望的意见を述べた。情報によると南京外交部では英大使に對して九ヶ國條約援用を要請したといはれるが、さらに外國駐在大公使を總動員して今次事變が全く日本の侵略的野心に出づるものであるとの宣傳をなし、外交的に有利な地歩を占めんとして大活動をなしてゐる事が明らかとなつた。前支那駐屯軍司令官田代皖一郎中將は危篤に陥る▲宋哲元北平で安民布告を發す。

北支移動の中央軍三十師

七月十六日

冀察當局は事變に關する折衝について「事變に關する折衝は目下天津において日支双方の關係者間に繼續され意見の接近を圖りつゝあるが公的交渉開始の時日は未定である。且つ事態前途の見透しもつかず圖つて一兩

日中に解決の見込みはないであらう」と發表した。これは要するに事件不擴大と現地解決にわが方が最大の努力を挑むところにあるにもかかはらず、對露元の交渉を速進せしめその間に中央軍の北上に時間的余裕を與へてこれを援助せんとする現狀であることが露明されるので軍當局は極度に興奮するに至つた。

午後一時四十分陸軍總長一北支方面へ移動中の支那軍は主力をもつて平漢線(北平—漢口間)に沿ふ地區に、各一部をもつて津浦線(天津—浦口間)及び平綏線(北平—綏遠間)に沿ふ地區を前進中なるが如く十五日までに膠濟線(海州—西安間)以北山西省境以東の地區に集中せる兵力は平時兵力と合しすでに約三十師に達した。

日高參事官高と會見 南京大使館のわが日高參事官は六日高島洲司令長に會見を求められたので午後八時半同司令長を訪問、二時間に亘つて會談した。席上日高參事官は事件の真相を詳細に説明した後日本側の決意を披露して事件の円満なる解決以外何ら政治的意圖なき公明正大なる態度を強調して「もし中央側が軍事的、政治的に眞摯當局を牽制強迫するが如き事あらば或ひは由々しき大舉に主るであらう」と警告した。

北平戒嚴撤廢を要求 今北平駐在武官は午後四時乘德純市長を市政府に訪ひわが方の事態不擴大方針には何ら變りなき事を説明すると共に北平城内の戒嚴撤廢、行方不明邦人の捜査、北軍線列車内における第廿九軍兵士の越境行動禁止等につき善後處理方を要請した。

上巻生團は日本派兵の報によつて抗日意識を高めて「學生抗日義勇軍」を組織して前線慰問、義捐金募集等に活動する事となつた。ヒューゲンメン英大使は王外交部長を訪ひ北支の情勢を聴取したが米國ではハル國務長官が聲明を發して日支双方に事件不擴大を要請した。

田代前司令官逝く

▲駐屯軍司令部午後五時十分發表 前支那駐屯軍司令官陸軍中將田代隆一郎氏は病氣宿疾のところ本十六日午前十時五十分司令官官邸において卒去せらる。なほ葬儀は十七日午後三時より司令官官邸において佛式により假葬儀を

行ふこととなつた。

香月司令官に最後の方針の訓電飛ぶ

七月十七日

政府は北支の情勢急迫しつゝあるので午前十一時から杉山陸相、米内海相、廣田外相、賀屋藏相、馬場内相ら連日五相會議において各相よりそれら諸般の情勢を説明したる後北支の交渉は速進を許さず政府はこれが促進に關する懸念を決定した。帝國政府の最後の方針は右五相會議で決定したので具體的措置に關し外務、陸軍、海軍三省首長は午後三時から外務省で重慶會議を遂げた結果三省の意見が完全に一致したので政府は直ちに天津の香月司令官に訓電を發する一方、外務省でも南京の日高參事官に對し現地解決の側面的援助方につき訓電を發した。

大城戸武官の重大通告

南京駐在陸軍武官大城戸大佐は十七日午後六時何應欽に會見を求めたが多忙のため拒絶したので對露陸軍政務次長と會見した。席上大城戸大佐は口頭を以て「國民政府は韓津・何應欽協定を無視し中央軍を北上せしめ又は空軍を行使するが如き事あらんか、日本軍は必要と認める措置に出づる事あるべくその結果いかなる重大事態が發生してもその責任は全く國民政府にあり日本軍の關知するところではない」と通告し左の公文を手交した。

公文

昭和十年五月十一日より同年七月九日に至る期間において在北支日本及び中國兩軍事實局間に成立せる諸般事項を無視し中央軍(航空兵力を含む)を北上せしめ又は航空兵力を行使せんとする態度をとるが如きことある場合においては日本軍はその海軍と協同する態度に出づることあるべく右により發生する事あるべき一切の事態に關する責任は國民政府にあることをこゝに通告す。

外交部の緊張

國民政府ではわが大城戸大佐の通告を以つて二十九軍對日本軍の現地的局面からさらに韓津・何應欽協定をめぐり中央對日本軍の直接衝突の危險を加へた最後の段階に達したものと認め各軍機關及び外交部は息詰るやうな緊張を呈するに至つた。一方外交上においてロンドン、パリ、ニューヨーク駐在中國大使は中央の命によつて一齊に活動を開始し大いに露軍に對する

當の時期における列國の干渉誘致の素地を作りつゝあるものゝ如くである。

中央、戦區配備を決定

國民政府軍事委員會は全面的に戰時編成と戰區配備を決定し蔣介石は正式開戦と同時に

國海空軍總司令の名をもつてこれが指揮に當る事となつた。

一、河北區 總司令馮玉祥、前敵總指揮宋哲元（所屬第二十九軍を以つて平津地方の防衛に當る）

▲左翼 總指揮陶鈞山、同副指揮傅作義（山西軍の主力をもつて平綏綏沿線に集結、必要に應じて張家口及び北平方面に進出せしむ）

▲中路 總指揮蔣鼎平、同副指揮陳誠（平漢線正面を擔任、商震軍二万、万福麟軍二万、龐炳勳軍一万、中央軍十二万をもつて保定方面に集結せしむ）

▲右翼 總指揮韓復榘、同副指揮胡宗南（山東軍五万をもつて津浦綏、膠濟綏南線の防衛に當り必要に應じて中央軍十万をもつて防衛せしむ）

▲豫備隊 總指揮劉峙（平漢線、隴海線、津浦綏沿線の中央軍を統轄し必要に應じて左右兩翼に應援する體勢をとること）

一、河東區 （滬寧、滬杭兩線を中心とし江蘇浙江兩省を統轄）總指揮何應欽

▲江蘇沿海 總指揮張發奎 ▲浙江沿岸 總指揮張學良 ▲長江警備司令 楊虎

わが最後の通告發せらる

七月十八日

今朝外務省省公電によればわが日高參事官は十七日午前十一時半帝國政府の訓令にもつき南京政府外交部に王外交部長を訪問、別項の如き覺書を手交したに對し王部長はその重大性にかんがみ一應考慮の上十九日中

に回答する旨を答へた

南京大使館發表——本省の緊急訓令に接した日高參事官は十七日午後十一時半外交部長王寵惠に會見、先づ口頭をもつて本省の訓令覺書を説明した後左の如き覺書を手交した

帝國政府においては本月十一日の聲明においても明かにされた通り飽くまで事態不擴大の方針を堅持、和平的折衝の望みを捨てず懸

念自重現地において解決を期しつゝあるにも拘らず中國政府においては挑戰的態度を持續してゐるのみならず各種の手段と方法とをもつて冀望當局の解決條件實行を妨害し、北支の安定を脅威しつゝあるは帝國政府の洵に遺憾とするところにしてこのまゝ推移するに於いては遂に重大不測の事態の發生せざるなきやを恐るゝ次第なり。中國政府の方針もまた事態不擴大にあるは王部長閣下が屢次言明せられたるところなるに鑑み帝國政府は中國政府において眞にかくの如き希望を有せらるゝに於いてはこれが實現のためあらゆる挑戰的行動を即時停止し並に現地當局の解決條件實行を妨害するが如きことなからんことを要請す。なほ右に對し速かに適切なる回答を與へられたし

なほ日高參事官は十八日午後零時廿分イギリス大使ヒューゲッセン氏を、奧村書記官は午後三時アメリカ大使館をそれぞれ訪問して帝國政府の支那側に手交した覺書内容を説明したが英米兩國大使とも「事態の擴大は憂慮に堪へず懸念なる解決を望む」旨を述べた。

國民政府蔣介石に請訓

わが日高參事官および大城戸大佐の重大通告に接した國民政府は俄然緊張し本日午前八時から緊急行政院會議を開き各部長その他十四名出席、大城戸武官および日高參事官から提出された帝國政府の覺書を中心として國民政府のとるべき態度につき前後五時間に亘る協議を遂げた結果廬山の蔣介石に報告請訓をなした。

宋哲元、香月司令官に口頭で陳謝の意を表す

宋哲元ならびに張自忠は本日午後一時天津のわが信託社に香月司令官を訪問、今次事變に關し口頭を以て正式陳謝の意思を表明した。而してわが要求事項に關しては橋本參謀長と張自忠との間において折衝すべき旨を申し出たが、宋哲元の申出では單なる口頭陳謝に止まり且つ橋本、張の折衝に關しても何ら具體的に明示するところなく従來の態度に徴して表面叩頭陳謝する一方ますます戰備を進めつゝある事實があるのでわが方は事實をもつて誠意を示さぬ限り一片の口頭陳謝のみでは信を措くに足らずとして嚴然たる態度をもつて監視する事となつた。

わが大使館付武官喜多少將は午後十一時上海發南京に急行▲國民政府高亞洲司長は日高參事官と會見後廬山に向つた▲南京で日貨排斥組織される▲馬占山抗日運動に躍り出す▲米國製の爆撃機六機南昌に急送立體戰に備ふ▲廬山の談話會で蔣介石は大いに抗日氣勢を煽つ

たとの情報があつた。

中央軍我飛行機を射つ 中央軍が關々河北省に進入してゐるとの情報に接したわが飛行機は十八日某方面の偵察に出動中平漢線順上空において北へする支那軍が不法にも一齊猛射を浴せ機翼に數弾を見舞はれたので同機は自衛上やむなく應戦した後無事歸還した。日本軍の偵察飛行は梅津・何應欽協定に基づく合法的行動なのである。

外交部、飽くまで現地解決を拒否し來る

七月十九日

國民政府外交部日本科長重光葵は午後四時半帝國大使館に日高專使官を訪問し帝國政府の通告に對する支那側の書面を手交した。右書面は我方の誠意を説明し地方的紛争は一切否認する旨を明したもので北支時局はいよいよ最後の大決裂に至つたものと見られるに至つた。大使館發表による支那側の書面内容は左の如くである。

支那側の回答

中國政府は事件不擴大主義のもとに和平解決に努力しつゝあり、支那の軍事行動は日本軍平津一帶増兵に對する當然の自衛準備に過ぎない。中國政府は事件の不擴大を希望するの故を以て日本政府に對し

- 一、一定の期限を限り日支兩軍同時に軍事行動を停止し武装部隊を撤回すること
- 一、今回の事件に對しては外交手段を以て解決すること
- 一、今日の事件に對しては外交手段を以て解決を圖らんとする如何なる現地協定も中國政府の承認を得る事の二項を提出する。なほ地方的性質を有するの故を以て地方的にこれが解決を圖らんとする如何なる現地協定も中國政府の承認を得る事を要する。また中國政府は紛争解決のため仲裁を判の如きあらゆる方法を接する。

廿日以後自衛權發動を聲明

▲午前十二時二十二分陸軍省發表—支那側は漢口東路および同北方六キロ入賣山、その西方衛門口付近において昨十八日依然然地を增強中なり

漢口東路において新陣地を構築中であつた支那兵は午後五時ごろ不法にもわが警備隊に對し突然猛射を浴せた。このためわが山崎部隊長は負傷したので嚴重なる支那軍の暴行に我軍は憤激してゐる。また同日午後七時ごろわが北平天津間の軍用電話線が支那軍のため切斷されたので我軍は直ちに現地で修理に着手したがこれは北平津線最終議定書に列國駐兵隊の主なる理由として北平、天津、山海關の交通線路を確保してゐる重要項目の破壊である。

わが支那駐屯軍は支那側の不信、背信、不誠意極まる態度に對し最早や隱忍もその限度に達したものと見ていよいよ自衛權發動を決意するのやむなきに至り、十九日夜左の重大聲明を發表すると共にこれを宋哲元にも通告せしめた。

聲明

今十九日までの状況を見るに支那軍は漢口東路およびその付近よりしばしば斥候等をもつてわが部隊直前に進出射撃をなし十九日午後五時ごろ遂にわれに負傷を生ずるに至つた。また漢口東路附近において該地の保安隊はわれに對し陣地を設備し且つ永定河西岸にある支那軍と聯絡し今なほ盛んに陣地の構築中である。この間に遂に日本軍は隱忍目重一發も應射せず忠實に協定を履行してゐる。しかるに支那側の行動は右の如く明らかに協定に違反するのみならず日本軍として自衛上黙し難きところである。従つて支那軍が依然かくの如く不信背信をくり返すにおいては軍は二十日以後獨自の行動をとるのやむなきに至るであらう。

蔣介石の豪語

蔣介石は午後二時中央軍前線部隊に勅諭を命ずると共に「國民に告ぐ」の聲明を發し「中國の主權は絶対に侵蝕される事はす主權保持のためには一戰をも辭せぬが一度戰爭が始めれば底止するところを知らぬであらう」と述べてゐる

喜多武官何應欽に勸告

喜多武官は午前七時南京に到着、帝國陸軍代表の資格をもつて午後三時から四時まで軍政部長何應欽と會見「帝國政府出兵軍部においては不擴大主義の下に事件の迅速なる解決に努力してゐる。しかるに支那側の行動は全然日本側の期待に反し民心の煽動、現地協定の不承認、梅津・何應欽協定を無視せる中央軍の北上等わが方に對する挑戰的行動枚舉に違なし、支那側は漸らく一觸即發の現状において小事に拘泥せず速かに空軍の復員を斷行せよ」と勸告した。これに對し何應欽は「中央軍の北上は承認するもこれは自衛行動に過ぎぬ」と種々陳辯するところがあつた。

閣議、既定方針に則り自衛的處置を決定

七月二十日

政府は午前十時半から重大閣議を開き關係閣僚より北支情勢の報告あり既定方針に則り適切な處置を講ずる事として午後二時十分一旦散會、午後七時五十分より再び閣議を開き緊張裡に今後政府のとるべき態度につき種々協議の結果、風見書記官長をして左の事項を發表せしむる事とし同九時五分散會した。

風見翰長談

北支における局地的解決協定は十九日午後九時成立するに至つたが、支那兵團中右協定の履行を妨げ不法砲撃等の舉に出で治安を紊すものあるのみならず協定履行の誠意を認め難き情勢あるを以て政府は既定方針に則りその履行を監視するに十分なる自衛的適切な處置を講ずることと決定した。

廣田外相は午後九時十分閣議散會後直ちに參内北支事變に對する帝國政府の處置を委曲奏上した。

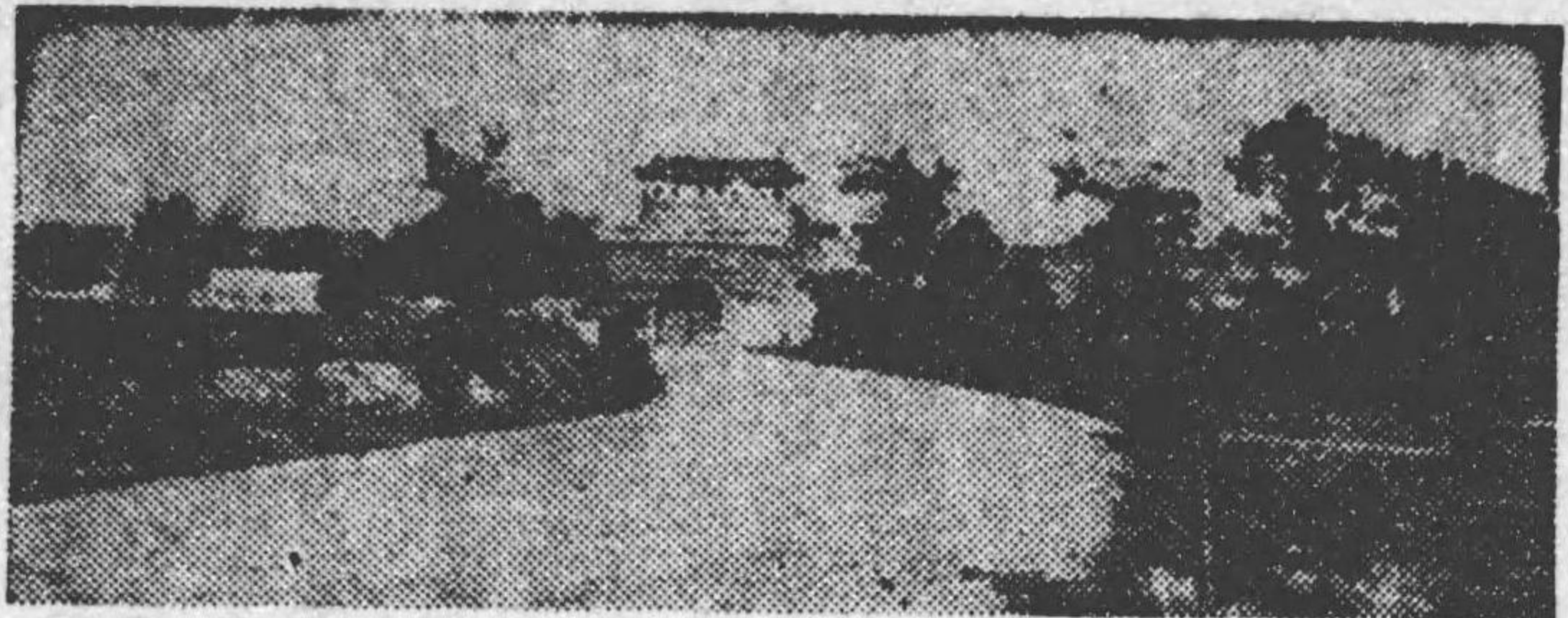
▲駐屯軍司令部發表表——七月十一日刷印せる協定第三項實施のため共産黨排日運動の嚴重取締に關する細目協定は昨十九日午後十一時橋本參謀長と第廿九軍代表との間において成立せり。

日高、王の會見

南京の我が日高參事官は午前八時外交部に王部長を訪ひ十九日重道警日本科長より手交された證書を正式回答と認めて差支へなきやと實したるに、王部長は回答と認めて差支へなしと説明した。

許大使外相と會見

駐日支那大使許世英は午前九時廣田外相を官邸に訪問、歸任挨拶をかね北支事變に對する帝國政府の意向を打診したるに對し廣田外相は帝國の決意を明示し國民政府側の反省を促した。



宛平縣城

痛烈なる皇軍の膺懲的反撃

▲午前六時三十分陸軍發表表——北支事變發生以來わが駐屯軍は政府の意を體し隱忍自重、事件の和平處理に最善の努力を續けて來たが第二十九軍側においては去る十八日陳謝の意を表したるに拘らず昨十九日夜瀋陽橋附近において再び我軍に不法射撃を加へ、或は北平天壇間において我軍用電線を切斷し、さらに二十日午後一時八寶山及び長辛店附近の支那兵は我れに向ひ盛んに砲撃を行ひしを以て豊台のわが軍は坐視する能はず遂にこれと砲撃を交ゆるのやむなきに至る。わが軍の堅持せる事件不擴大の希望が全く蹂躪さるゝに至つたことは遺憾である。

▲陸軍發表表——七月二十日朝以來支那軍は盛んに我れを砲撃中なりしが午後二時過ぎ支那軍は八寶山及び瀋陽橋より日本軍に向ひ攻撃前線を開始せり、わが軍はやむなくこれに應戰中なり。

▲瀋陽橋附近の支那軍は午後二時三十分我軍に對し突然射撃を開始したので我軍も俄然砲門を開いて一齊砲撃を開始した。砲撃を以て宛平縣城を蔽ひ交戦三十分にして敵を沈黙せしめた。

午後七時ごろ支那軍は又も瀋陽橋附近西側高地の陣地より豊台附近の我が部隊に迫撃砲の猛射を浴せたので我方もやむなく應射、砲撃を以て天地を揺がした。かくて我方の反撃により瀋陽橋の空高く聳えた望樓二ヶ所は完全に破壊され長辛店の支那軍砲兵陣地をも沈黙せしめたので午後八時ごろ砲撃漸く絶えた。交戦約一時間、我方の砲撃により瀋陽橋の支那兵營に火を發して炎々然とあかりさらに宛平縣城にある兵器庫にも火災を起した。

蔣介石南京に歸る

蔣介石はこの日午後六時三十分急遽廬山から南京に歸り直ちに中央軍官學校内の軍事委員長官邸に入り午後八時から軍事委員會最高幹部緊急會議を招集、對日方針について協議の結果、對日戰備の強化、英、米、ソ聯に對する外交工作推進等を決定した。

▲軍政部航空委員會緊急會議の結果「全支の空軍整備を戰時體制に移す」保定方面に進出せる高射砲、高射機關銃隊に對し「日本軍

行は「我々大義を成せよ」との命令を發した。支那軍の飽くなき挑発行動に對し皇軍は斷乎暫刻の反撃を加へてこれを沈黙せしめたが宋哲元は我方に對して新門口、八寶山一帶にある馮治安麾下の第三十七師を廿一日午前十時から正午までの間に後方に撤退せしめ石友三麾下の保安隊と入れ替へることを約した。よつて我方はその實行を見届けるため日本側代表中島、櫻井、笠井の三軍顧問は支那側委員と共に廿一日早朝現地へ赴く事となつた。

七月二十一日

北支の事態は支那側部隊が退却しつゝ完全に撤退を履行するか否かにかゝり前途の豫測は依然困難であるが中央軍の北支進出は日を経るに従つて活発となり、保定を中心にして河北に集結した中央軍は二十六万と算せられ二十一日の中央政治委員の決議は日支開戦の危機を一段と激化して局面打開はもはや困難と見られるに至つた。かくて問題は第二十九軍對わが豐台部隊の局部的關係を離れて中央軍を敵とする日支兩軍の全面的衝突を招来するの觀あり、中央軍の河北進出を停止せざるかぎり局面は最悪のコースを敷進する形勢を呈して来た。

宋哲元の威令行はれず

この日午前十時、第二十九軍の抗日隊馮治安の第三十七師の撤退開始によつて宛平付近における形勢は二十日の衝突のみで食ひ止められるかに見られてゐたが、果然危惧されてゐた如く第三十七師の少壯將校兵士間の抗日氣勢は宋哲元の命令を肯んぜず、なほ八寶山永定河右岸に頑張つて動かす事態は依然として危機を脱しない。

宋から撤退を報告

わが松井特務機關長、今井武官、中島顧問らは宋哲元に對し支那軍の撤退不履行を詰つこところ、宋は「二十一日午後八時入曹山部隊の西宛への撤退を命じた」旨を回答した。而して支那側は引續き午後八時半に至り「約束通り入時から撤退を開始した」旨を通告して来た。また「瀋陽橋西岸部隊も午後八時には撤退した」と報告して来たが、日本側はこれを信じ難しとしてまづその實行を監視する事となつた。

廣田外相許大使に警告

南京軍事委員會は廿一日夜宋哲元より「停戦協定成立し前線部隊撤退中」との報告に接し地方的不承認主義の手前少からず狼狽の儀様であつたが中央としては右停戦協定に對し暫らく成行を即断すると共に北支の日本軍に對して戰備繼續の方針を決定したと傳へられる。駐日大使許世英はこの日午前十時二十分廣田外相を官邸に訪ひ會談一時間に及んだが、廣田外相

より現地協定を妨げず且つ挑発的行動の即時停止を嚴重に通告して支那側の反省を促すところあつた。

七月二十二日

南京政府はつひに宋哲元に對して現地協定を承認する旨通告したいといはれる。しかしながらわが軍當局としてはそも／＼今次事變は冀察と日本との關係を悪化し、北支の中央化を圖らんとした南京政府の策謀に端を發したのであるから事變の責任の一半は二十九軍の外明らかに南京政府にあるにかゝはらず、南京政府は終始冀察を牽制もしくは煽動しておきながら日本の毅然たる態度が表明されるに及んで俄かにその態度を一變して冀察に對する壓迫を停止し、現地協定を承認するといふ名目下にわが鋭鋒を敵対する政策を示した形跡が認められるとなし、わが方としては南京政府が現地協定を承認すると否とに關せず客觀的情勢が日本にとり満足すべき状態に立ち至るまでは飽までも獨自の立場をもつて事態の徹底解決に邁進する方針の下に事態を注視する事となつた。

三十七師の一部撤退

北平城内から撤退する馮治安麾下第三十七師の一部五百名を乗せた最初の列車は二十二日午後五時半保定方面に向け南下した。平漢線の北平西停車場を發した同部隊は第三十七師の二百二十團らしく迫撃砲隊一連、機關銃隊一連を交へてゐた。城内留守部隊も引續き輸送の模様である。

黃村集結部隊動かす 八寶山付近の支那軍は二十一日夜黃村に集結を完了し、瀋陽橋以南地區一帯の部隊も二十二日午前十時現在長辛店方面に向け後退中、但し黃村集結の部隊が西宛に撤退の模様なく、わが軍は約束通り撤退するか否か緊張を緩めず監視中。

陸軍省現地協定成立を發表

七月二十三日

陸軍省では現地協定成立に關し午後八時二十分左の如く發表した
▲陸軍省發表一支部駐屯車よりの報告によれば今回の北支事變に關し冀察側においては責任者の謝罪、處罰の外今次事變の原因はいはゆる陸軍社、共産黨その他の抗日系各種團體の指導に歸せるところ多きに鑑み、將來これが對策取締を徹底することを協定せり。即ち冀察側はこれが實行のため七月十九日文書により左記具體的事項を自發的に申し出でたり。

一、日支國交を阻害する人物を排す

一、共産黨は徹底的に弾壓す

一、排日的各種機關團體及び各種運動軍にこれが原因となるべき排日教育の取締をなす

また別に冀察側は今回日本軍と衝突したるは主として第三十七師に屬するものなれば、將來双方の間に意外の事件發生を避くるため同師を北平より他へ移駐する旨を通告し來り、昨廿二日午後五時以降列車により逐次南方に移動中なりと。駐屯車は目下これが實行を嚴重に監視中なり。

陸相閣議に報告

杉山陸相は本日閣議席上現地よりの報告に基き支那兵の撤退は我軍の監視中比較的平穩に行はれつゝありと報告した。

蒋介石の妥協轉向説

蒋介石は南京歸來後國民政府首腦部と種々對策協議中であつたが、英米その他列國の對支情勢の不利と財界の反戰論とにより孫科、馮玉祥、陳立夫等の抗日強硬論を制して對日妥協的態度に轉換したと傳へられる。梅津・何應欽協定を陸閣して目下北支に侵入してゐる中央軍は無慮十五万、飛行機三十機と駐せらる。

支那軍撤退中止、形勢逆轉

七月二十四日

蒋介石は軍政部長蔣鼎勳を北支に特派する事となり、熊斌は廿三日飛行機で南京を出發保定に至りさらに列車で長辛店へ、長辛店から自動車で北平に入つたが、直ちに宋哲元以下冀察首腦部と會見し蒋介石の意向を傳へると同時に徹底的抗日を勸説したので、前日まで日本側との約諾を履行せんとしつゝあつた冀察側内抗日分子の態度俄然變化し、第三十七師の撤退中止をはじめ種々不信行爲に出づるに至つた。すなはち支那側の情勢は

(一) 吉興文麾下第二百十九團は依然永定河右岸に據り撤退せず (二) 第三十七師司令部は依然西苑にあり (三) 獨立第二十五旅、第一百十二旅は共に撤退の模様なし (四) 第一百十旅は八寶山より二里撤退せるのみで同地付近より長辛店方面に陣地構築中。

さらに第三十七師に代つて北平警備に當る後定の第百卅二師は撤退後入城を確約せるにもかゝらず、第三十七師第百十八團の撤退を完了せる現在早くも第六百七十九、第六百八十一の二團を入城せしめる有様で、支那側の行動には信し得ざる點多く形勢又また逆轉するに至つたのである。

支那軍の撤退状況は午後に至るも誠意の認むべきものがないのでわが松井特務機關長、今井國軍武官、池田駐屯軍參謀は午後三時進徳社において宋哲元と會見し約諾の即時實行方を嚴重に督促した。

この日午後三時わが日高參事官は外交部亞洲司長高宗武と會見、一時間に亘り北支時局打開について會談したが支那側は飽くまで不適な態度を示し何ら得る所がなかつた。

南支の排日激化

廣東における排日空氣激化したのでわが中村總領事から當局に警告、また汕頭の排日も險惡化した▲上海上陸中のわが陸戰隊員官補一等水兵は本日午後支那人に拉致されて行方不明となる。

七月二十五日

午前十一時三十分陸軍省着電による支那側の情勢は左の如くである。

一、北平にありし支那側部隊は昨二十四日撤退の模様なく運糧車輛數の不足を名として列車をも運轉せず
二、第三百三十二師(師長趙鄧禹)の獨立第二十七旅は約諾に反してすでに北平に入城し、第二旅は二十四日固安(北平南方永定河の南岸)に到着し第一旅は平漢線を北上中の如し

一、昨二十四日南京より山砲八門を北方へ輸送せり

一、北支事變和平解決の機運現れるや、山西太原の空氣は俄然激化し、我が太原機關の使用人に對して逃亡を強要する外昨二十四日機關長が支那綏靖公署朱參謀長と會見のため午後五時頃綏靖公署に到らんとするや、公安局側のため計畫的に阻止せられたり、本件に關しては目下抗議中なり。

冀察首腦の重大會議

天津市長張自忠は午後七時特別列車で北平に到着、直ちに進徳社において宋哲元、秦德純、齊燮元、湯治安、劉汝明、趙鄧禹らと共に冀察首腦會議を開き深更に至るまで何事か重大協議を重ねたが、事變に對する最後方針を決定するもの

として注目された。

宋子文、蔣に和平を進言 宋子文は午前九時半上海から南京に飛來し軍事委員長官邸に蔣介石を訪ひ浙江財閥の意向を傳へて和平解決を進言した。▲北上した熊斌參謀次長は午前平漢線で南京に歸任▲わが日高參事官は英、獨大使に北支事變に關する現地の實情を説明した。この日午後十一時十分我部隊は郎坊において第三十八師の不法射撃を受けこれと交戦(詳細は廿六日の項)

郎坊驛の激戦

七月二十六日

▲午前十一時陸軍省電の要一應傳機事件の發生以來天津、北平間の軍用電話線が支那軍のため頻々と切斷されるので我軍が電線修復中二十五日郎坊驛附近(天津西北方約七十キロ)で又また障害があつたので軍はその旨支那側に通告した。後これが修理のため通信隊の一部及び掩護として五ノ井部隊を天津から派遣した。かくて該部隊は郎坊驛内で故障個所の発見および修理を實施中、午後十一時十分ごろ支那軍は突如小銃、機關銃等をもつて我軍に射撃を開始し、さらに郎坊驛北側三百メートルの支那兵營からも迫撃砲等の射撃を浴びせたので、五ノ井部隊もやむなくこれに應戦し孤軍よく敵の攻撃を支へつゝ急を報じたので、駐屯軍は直ちに輦衛部隊主力を同地に派遣、午前六時半乃至七時半の間に逐次戦線に參加せしめ、北平居留民保護のため北上した廣都部隊及びわが飛行隊協力の下に午前八時ごろ支那軍を潰走四散せしめると共に午前十時五十分ごろからはさらに安定(北平南方約三十キロ)に向つて追撃を開始し、廣都部隊も北平方面に列車によつて敵の追撃をはじめた。

▲午前六時二十分駐屯軍司令部發表一本日午前五時過ぎ郎坊上空に遊せるわが飛行機よりの報告によれば、わが増援部隊の先頭はすでに驛場に到着したり、五ノ井部隊は依然停車場を占領中である。



郎坊における支那軍の斬首

る。郎坊の支那軍兵營には支那兵充滿しわが飛行機は遂に兵營目撃して燃焼を授け多大の損害を與へた模様である。

▲駐屯軍司令部發表一郎坊の敵はわが飛行機の襲撃によりすでに退却を開始したが、輦衛部隊は残敵を攻撃し午前八時遂に郎坊を占領せり。なほ一部隊をもつて黃村に向け追撃中なり。

事變後最初の爆撃

情報によればこの日わが五ノ井部隊の苦戦を知るや坂口、上條、三輪の各空軍部隊は午前六時半相續して廣都軍を連らねつゝ一齊に飛行機を運用し、郎坊に襲撃する支那軍に向つて事變後最初の猛烈な大爆撃を敢行、われに猛射中の敵軍を完全に叩きのめして一旦飛行機に射撃を停めて退却、同十二時さらに郎坊附近の敵軍に再度の爆撃をなして多大の損害を與へたが、わが空軍の威力は百發百中敵陣を粉砕し、敵の大砲兵營等木々地獄に押しつぶされが壯快極まりなかつたといふ。▲この襲撃における輦衛部隊の損害は△重傷四(下士官一、兵三)△重傷九(下士官一、兵八)である。

軍司令部最後通牒を發す

駐屯軍司令部の最後通牒に加ふるに第三十八師と日本軍との間に郎坊事件を發生するに至つたので、わが駐屯軍司令部はこの日午後三時半北平電に對して遂に最後の通牒を發するに至り左の如く發表された。

駐屯軍二十六日午後三時半發表一 應傳機事件以來支那駐屯軍は不續大規模解決の方針の下に第二十九軍と協定結成支那軍隊の數回に見る不法不信行為に對しても努めて隱忍自重し以て支那側の協定履行を嚴重監視せり、然るに支那側は協定履行に言を託して遷延せるのみならず遂に昨二十五日郎坊の支那軍隊はわが通信隊掩護の僅少なる部隊を侮り不法射撃を實施しわが軍に損害を與へたりかくの如きは支那軍が單に侮日抗日の挑発的行動たるに止まらずわが軍との協定履行に全然誠意を缺くものと斷せざるを得ず。茲において軍はその公正なる使命に則り斷然支那側の協定履行の誠意を實しこれが迅速確實なる履行を應發するため左の如き最後の通告を北平特務機關長松井大佐をして第二十九軍長宋哲元に本日午後三時半手交せしめたり。

二十九軍への通告

昨二十五日郎坊において通信交通遮断のため派遣せる一部我軍に對する貴軍の不法射撃に起因し遂に兩軍の衝突を免るに至りしは遺憾に堪はず、かくの如き事變を起しに至るは貴軍が我軍との間に協定せる事項の履行に對する誠意を

映き依然挑戦的態度の緩和をなさざるに起因す。貴軍において依然事態不擴大の意思を有するにおいてはまづ速かに瀋陽橋及び八寶山付近に配置せる第三十七師を明二十七日正午までに長辛店に後退せしめ、また北平城内にある第三十七師は北平城内より撤退し、西苑にある第三十七師の部隊と共にまづ平漢線以北の地區を経て本月二十八日正午までに永定河以西の地域に移し、爾後引つゞきこれら軍隊の保定方面への輸送を開始せらるべし。

右實行を見ざるにおいては貴軍に誠意なきものと認め遺憾ながら我軍は独自の行動を執るのやむなきに至るべし。この場合起るべき一切の責任は當然貴軍において負はるべきものなり。

北平廣安門でわが軍を挾撃

北平居留民保護の重大任務を帯びた廣安門部隊はその後豊台に到り更に北平城内のわが兵營に入る事になつたのでわが松井機關長から北平市長桑徳純に交渉し、外城廣安門通過の應諾を得たので午後六時ごろ冀察軍事顧問松井少佐が連絡のため同門に赴いたところ、警備中の支那軍が城門を閉ざしてゐるので再三折衝の結果同七時ごろ漸く開門する事となつた。然るに支那軍はわが部隊の三分の二を通過せしめた時突如門を閉ざして城門の内外から手榴弾、機關銃をもつて猛射を浴びせたのでわが方もやむなくこれに應戦、敵の挾撃中であつてよく勇戦力闘したのであつた。このために我方に多数の犠牲者を出し松井少佐は重傷を負ひ同行の通譯は悲壯な戦死を遂ぐるに至つた。

断乎！自衛權發動を聲明す

七月二十七日

廊坊事件といひ廣安門事件といひ、底止するところなき支那軍の暴戾と不値不誠意極まる態度を見て最早「事態かくなつては最早や願ひする能はず、よつて軍は茲に獨自の行動を執る」べきことを通告すると共に、北平城内に戦禍を及ぼさざるため支那側が即刻全部隊を城内より撤退するやう勸告した。

北支の事態がいよゝ重大化したので政府は午前、午後二回に亘つて緊急閣議を開き、重大時局に對峙すべき方針を協議した結果午

後一時半書記官長談の形式を以て帝國政府の態度を左の如く中外に闡明した。

帝國政府の聲明

北支の安寧は帝國の常に至大の關心を有するところなり。然るに支那側の徹底せる排日政策は

屢々北支の平和を脅威し遂に瀋陽橋事件の勃發を見るに至れり、爾來帝國政府は東亞和平のため事件不擴大、現地解決を方針として平和的處理に努め、冀察側に對し支那軍の瀋陽橋付近永定河左岸駐屯停止、將來に關する所要の保障、直接責任者の處罰及び謝罪の極めて寛大且つ同地的なる條件を要求したるに過ぎず、冀察側は七月十一日夜右條件を承認したるもこれが實行に誠意を示さずして今日に及べり一方帝國政府は七月十七日南京政府に對してあらゆる挑戦的言動を即時停止しかつ現地解決を妨害せざるやう注意を喚起したるも、南京政府は現實の事態を無視し帝國政府の主張を容れず、かへつてますます戦備を整へいよゝ不安を増大せしむるに至れり。然れども帝國政府はなほ懸念、平和的解決に努力中支那側は七月二十六日廊坊において電線修理に任するわが部隊に不法射撃を加へ、さらに同日夕居留民保護のため冀察側の諒解を得て北平城内に入城中途のわが部隊に對し突如城門を閉鎖し不意に急射するの暴舉に出でたり。

右兩事件たるやわが駐屯軍當然の任務たる北平、天津間の交通線の確保及び居留民の保護に對する支那軍の武力妨害にして、今や軍はこの任務遂行並に協定事項の履行確保に必要な自衛行動をとるのやむなきに至れり。もとより帝國の期する所は今や事件の如き不祥事發生の根因を排除するに在りて善良なる民衆を敵視するものにあらず。また帝國は何ら領土的企圖を有せず、且つ列國の權益保護には最善の努力を惜まざることもろんり。東亞の平和確保を使命とする帝國は事茲に至るも今なほ支那側の反省により局面を最小の範圍に限定し、速かに圓滿なる解決を見んことを切望するものなり。

宋哲元辭職を打電

宋哲元は帝國政府の斷乎たる決意に對し部下の抗日意識熾烈にして威令行はれず進退兩難に陥つたので國民政府當局に「事態その任にあらず」として第二十九軍長、冀察政務委員長等一切の公職を辭する旨打電したが中央側は折返し慰留の訓電を發した。

我軍通州を爆撃

わが軍は從來の親善關係にかんがみ第二十九軍獨立三十九旅第十營約八百名の通州駐屯を默認してゐたが、わが方よりの撤退要求に對する態度無禮を極めたので曹錕部隊及び冀東保安隊は今曉三時より同隊の武装を解除せんとしたと

ころ、わが軍に射撃を加へるに至つたので遂に飛行隊の協力を相俟つて敵軍これに鷹を加へ同十一時頃敵の大部分を殲滅した。支那軍の死傷四百を下らず、我軍は武器弾薬等多數押収した。

南苑の衝突

南苑方面では午後五時頃三十八師の一部が又またわが部隊の行動を拒否し兵營付近でわが軍に射撃を浴せたのでわが方も意を決してこれに鷹、敵陣地にかけて猛烈な砲撃を加へると共に飛行隊とも協力を中からは機銃掃射して敵を沈黙せしめた。

北平邦人の捕虜

北平では事變後、北平に在留邦人三千八十名は交民巷(大使館區域)に避難し捕虜となる事となつた。かくの如きは三十七年前の北清事變以來はじめての事である。

膺懲の火蓋つひに切らる

七月二十八日

駐屯軍はいよいよ平津地方の支那軍を膺懲する事となり午前零時飛行隊開始に先立つて左の如く發表した。

駐屯軍二十八日午前零時發表

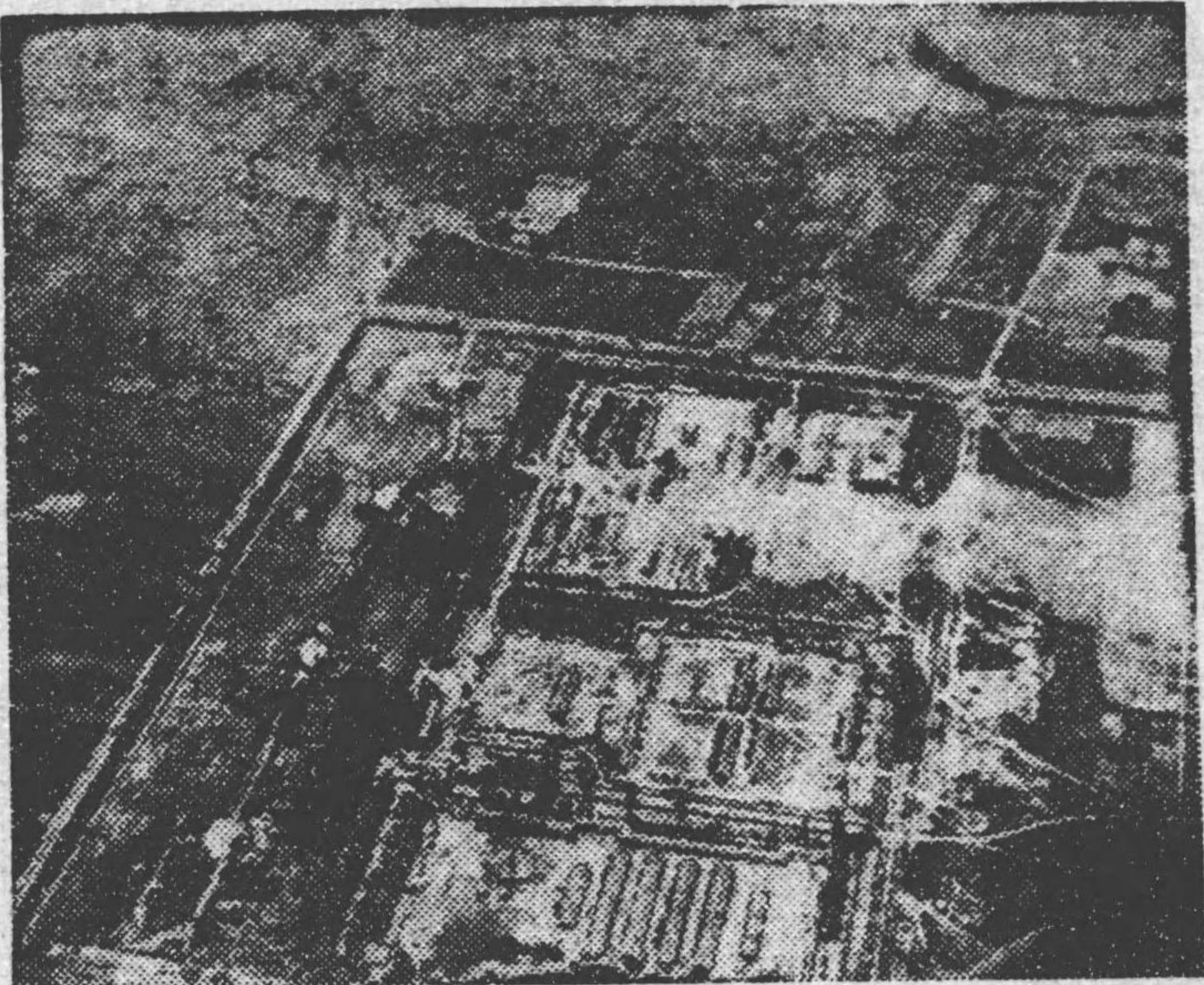
支那駐屯軍司令官曹月申將代理松井北平特務機關長は今なり。なかんづく廣安門における支那軍の欺騙行為はわが軍を侮辱するものにして斷じて許す能はず。軍はこゝに獨目の行動を執るのやむなきに至れりと通告し、北平城内に支那軍散在する時は城内混亂を惹起し鷹を及ぼすおそれあるを以て市民および在外人のため北平城内支那軍隊全部を直ちに撤退すべきことを通告せり。

かくて鷹に鷹を重ねてひたすら自重しつゝあつたわが部隊は一齊に行動を開始し二十九軍總部の火蓋はつひに切つて落されたのであつた。

南方戦線

まづ北平を中心とする南方においては川岸、河邊、曹錕部隊が勇躍して曹錕の大義勇軍に土氣ますく鷹を加へ飛行隊と協力して南苑の三十八師に三方から鷹を開始したが、さしも善兵なる敵も皇軍の威力に抗し得ず、北方に向つて潰

南苑の支那兵營爆撃



走しはじめたので河邊部隊は一部をもつて南苑に、主力は馬村付近に突進、東北方に進出した曹錕部隊と合して敵の退路を遮断する

と共に川岸部隊は殘兵を掃蕩して敵に鷹的打撃を與へ、午後三時完全に南苑を占領して曹錕高く日章旗を掲げたのであつた。

北方戦線

北方においては鈴木部隊が朝來牛房を陥れ疾風掃葉を掃くの勢ひをもつて前進し、正午ころには清河(北平北方九キロ)を攻撃して敵と激戦の後午後三時これを占領。さらに南進して夕刻には西苑に迫つて攻撃準備をした。また西井部隊は午前十時半沙河(北平西北方二十キロ)に據る敵を撃退してこれを占領し、翌日に進まされつゝ前進して夕刻には万壽山の北方地區に進したのであつた。

軍司令部發表の戦況

自衛行動開始第一

一日における軍司令部發表各方面の戦況は左の如くである。

▲駐屯軍司令部午前五時發表——川岸部隊の高木部隊は二十七日午後三時ころより行宮(南苑南方五キロ)の敵を攻撃し砲兵の適切な協力のもとに頑強なる敵の抵抗を撃破して午後七時十五分これを占領し引續き内部の掃蕩を實施せり、敵の損害甚大にして無慮五百に達した。

▲同午前七時二十分發表——西苑に對しては坂口部隊午前五時か

ら南苑に對しては午前六時二十分ごろ爆撃を加へ敵に多大の損害を與へた。

▲同午前九時三十分發表表——酒井部隊は北平の北方二十キロの沙河鎮にある第三十七師馮治安部隊を今朝來攻撃目下激戦中。

▲同午後二時十分發表表——鈴木部隊は悪路を冒して前進二十八日正午以來清河鎮にある支那軍を殲滅し目下激戦中である。

▲同午後四時發表表——川岸部隊の南苑掃蕩隊は堅固なる建物を利用して頑強に抵抗せる殘兵を殲滅し午後一時過ぎ南苑全部を占領せり。南苑兵營はわが飛行隊の爆撃、わが砲彈の命中、支那軍自身の放火等によりて荒廢し幾多の死體散亂慘憺を極めてゐる。

▲同午後四時發表表——酒井部隊は午前十時沙河鎮を占領せり、鈴木部隊は午後二時頃より清河鎮の敵を攻撃し午後二時半これを占領せり

▲同午後七時發表表——豐台方面におけるわが第一線においては依然として東五里店、西五里店、一文字山線を占領しあり。本日晝間八寶山および長辛店方面の敵砲兵より時々射撃を受けたるも戦線には異状なし。

▲同午後八時發表表——南苑北方に退却せる敵を追撃中なりし牟田口、川島、福田の各部隊は馬村付近において敵の退路を遮斷し殆んどこれを殲滅せり。馬村以東の地區には敵の死體累々として凄慘を極む。

▲停戦懇願を一蹴——この日午後警察側の使者はわが特務機關を訪問して三十七師の城内即時撤退を條件として停戦を懇願して来たがわが方はこれを直ちに一蹴し去つた。

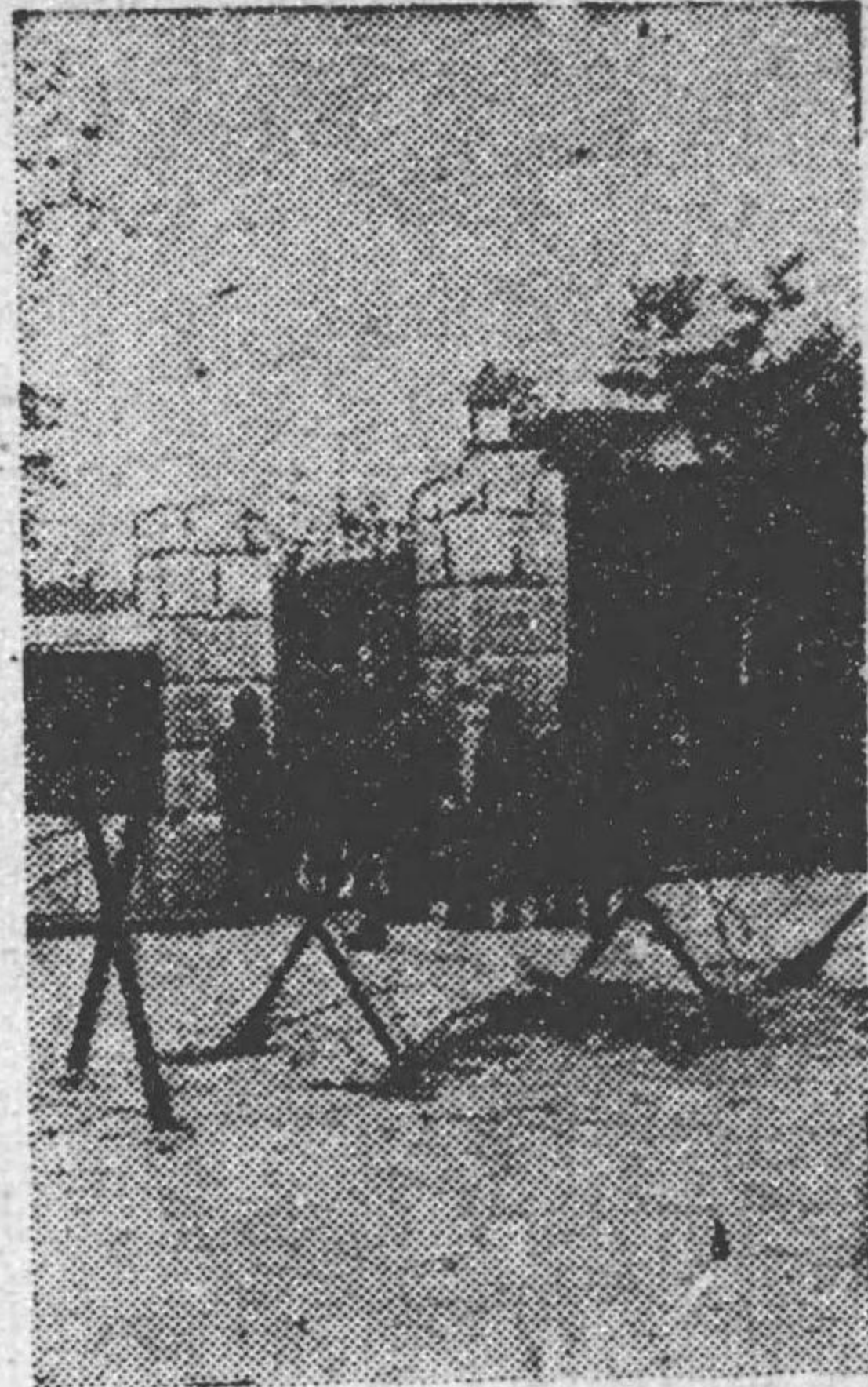
▲宋ら北平退去——宋哲元、秦德純、馮治安らはこの日午後十一時後事を張自忠に託して北平を遺れ保定に向つて退去した。

天津の市街戦 敵の陣地を爆撃

七月二十九日

前夜以來天津のわが軍に對して支那軍が夜襲し來るとの情報があつたので警戒中、第三十八師獨立第二千六旅の兵が飛行場をはじめ軍司令部、大倉庫、停車場、糧秣集積所等に頻々として襲撃して來たのでその都度これを撃退した。しかるに午前四時五十分に至り日本租界相街北方の支那街境界線のわが警察第一分署は抗日保安隊に包圍されたので、駐屯軍の應援を得て應戦したが敵はますます増援隊をくり出し北平、津浦兩鐵路局、保安總隊本部、警備司令部、南開大學等を占領してわが軍および居留民に向け小銃、機關銃、迫撃砲等によつて猛射を浴せるので遂に猛烈な市街戦を展開するに至つた。茲において駐

天津駐屯軍司令部前の警戒



屯軍司令部では意を決し午後二時に至つて支那軍主要陣地の爆撃を敢行する事となつたのである。

▲駐屯軍司令部午後二時二十分發表表——日本軍は天津市内においては市民および在外人に對し戦禍を及ぼすことを極力避けんがため武力行使を爲さざるを企圖せしに、測らずも支那側は昨二十八日夜半來市内各所において日本軍隊を攻撃せり、軍は自衛上これに應戦せざるを得ず、天津市内の治安を維持し居留民を保護する目的を以て市内における支那軍隊の重要占領地を爆撃するのやむなきに至れり。列國の權益尊重並にその居留民の保護については最善を期する次第なり。

▲駐屯軍司令部午後七時發表表——本早朝來敵の攻撃を受けつゝありし天津東站および總站のわが守備隊は終日これを完全に固守し夕刻軍司令部との連絡も回復せり。

かくて午後二時から開始された支那軍主要陣地の爆撃は午後六時近くまで地下部隊と呼應して間斷なく續けられ、爆彈の落下と共に大音響を立て、天地を揺かし敵の本據たる天津公安局、保安隊本部、天津電話局、八里台その他次々に粉砕され黒煙を天に沖して凄慘を極めたが、日没と共に一旦中止、さらに待機の體勢に入つた。

海軍も大沽砲撃

▲駐屯軍司令部午前八時十五分發表表——大沽において今朝俄然支那軍より射撃を受け陸海軍は直ちにこれに應戦せり、目下激戦中。

▲午前八時十五分大沽において陸海軍は支那軍より迫撃砲の射撃を受けやむなくこれに應戦、所在海軍部隊は陸軍と協力大沽攻撃を開始せり。

平津地帯敵軍の掃蕩成る

この日北平方面では我軍は破竹の勢ひをもつて殘敵を追ひ酒井部隊は夕刻までに主力を以て黃村を、一部を以て衙門口を占領、鈴木部隊は西苑付近の敵を撃破して北平西側地區に進出し河邊部隊は午後六時過ぎ完全に蘆溝橋(宛平縣城)を占領した。かくて北平西北方の敵を永定河右岸に擊退し、茲に支那駐屯軍は作戦開始から僅か二日にして北平周圍の敵の掃蕩を概ね完了したのである。

北平城内支那軍撤退

北平城内の支那軍は二十九日午前二時兩城の西直門、阜成門、廣安門の三門を通過して撤退を開始し午前四時完了、續いて市内にあつた巡警および保安隊が撤退を開始したが、彼れらは途中街を疾驅するサイドカーから南側軒並みの家に機關銃を發射しつゝ逃げ去つた。かくて戦禍を免れた北平市民ははじめて安堵の思ひをなしたのである。この日午前わが軍飛行機は北平市内に安民布告の傳單を撒布した。

▲駐屯司令部 午後六時三十分發表—酒井部隊は本日正午頃方壽山および玉泉山を占領し南方に敵を追撃中なり、北平警備隊よりの報告によれば北平市内は本日異常なくわが軍および居留邦人の士氣旺盛なり。

▲同午後七時半發表—二十九日夕刻までに軍は北平東北方の敵を永定河右岸に擊退せり。酒井部隊は午後三時四十分頃黃村に進入す、河邊部隊は午後六時過ぎ完全に宛平縣城を占領せり。

▲同午後十時發表—(一)鈴木部隊は西苑付近の敵を擊退してその主力を以て黃村に他の一部を以て西山に進出せり(二)酒井部隊は午後七時頃衙門口を占領せり(三)茲に支那駐屯軍は作戦開始より僅か二日永定河左岸平津地帯一帯を完全に占領する事となれり。

通州保安隊の叛亂

この日正午冀東防共自治政府所在地通州城外において第二十九軍の敗殘兵が掠奪行爲に出でたが、これと相呼應して冀東保安隊が支那側の逆宣傳に乗ぜられて叛亂を起しわが守備隊と壯烈な激戦を展開した。而して長官張汝勤氏は拉致されて行方不明となり、わが特務機關長細木中佐以下多數の戦死傷者を出したのみならず暴虐なる支那兵は居留邦人を各戸に襲撃して婦女子の別なく殘忍極まる殺戮をなしたのである。

天津車站前爆撃の跡



北平の治安維持會

警察政權は事實上消滅するに至つたので、北平市商會を中心とする支那側各機關は日本側と連絡をとり治安維持會を組織して北平の治安維持に任ずる事となり江朝宗、冷家驥その他の地方有力者らが相前後して松井特務機關長を訪ひ種々意見を交換した。

趙師長の戦死

北平來電によると第三百二十二師長趙師長、第廿九軍旅長修後部はわが軍の南苑猛撃と共に戦死したことが確實となつた。すなはち二十八日朝敵兵の指揮に當つてゐた兩名は皇軍の威力におそれ騎兵一ヶ小隊に守られながら自動車で北平に遁入すべく永定門に向つたが、右自動車が永定門南方大紅門付近にさしかゝるや、敗殘兵の北平遁入を豫め知つたわが軍はこの時すでに装甲自動車隊を大紅門上に配置して遊撃の姿勢をとつてゐた爲わが軍の猛烈な一斉射撃にアツといふ間もなく護衛の騎兵がバタ／＼と死れ、その死體の上に自動車を乗り上げる等大混亂に陥り一瞬にして殲滅したのである。この戦闘において趙と修は頭部に三發の貫通銃創を受けて座席に坐つたまゝ死れたのである。支那側では二十九日午後三時現報から死體を収めて城内懷仁堂に安置した。

天津市内残兵に爆撃續行

七月三十日

天津の日本租界隣接支那街東站付近および南開女子中學校付近に敗殘支那兵あり、さらに芙蓉街北端日支國境線より約二十間前方の支那街二階建民家等を敗殘兵が占據して日本租界に發砲しつゝあるので、わが軍は午前三時飛行隊と協力してこれら敗殘兵の掃蕩を行ひ、飛行機は必要な備所を避んでよく機體を散行多大の効果を収めた。

▲駐屯軍司令部午後四時發表—今朝天津防衛部隊は特別第二第三區の掃蕩を實施中にてイタリ—租界より東站地區の間の掃蕩を終了せり。日本租界に隣接せる支那街にて現在に至るもなほ兇惡なる支那兵多數ありてしばしばわが租界を射撃しつゝあるを以て、わが飛行機は午後三時よりその巢窟たる建物を徹撃し地上よりも歩兵隊を以て協力せり。

西沽、大沽を占領

▲駐屯軍司令部午前十一時半發表—海岸よりの通報によればわが大沽攻勢部隊は午前十一時西沽一帯を占領せり。

▲四午後三時發表—大沽攻勢部隊は引續き大沽の敵を攻撃し午後一時半完全に大沽を占領せり。今朝九時ごろ海軍大尉以下若干の將兵は船艇に乗り支那砲臺海峯を捕獲し目下棧橋に緊留しあり。

西山の残兵撃滅

北平城外西方西山の山奥に潛入した第三十七師の敗殘兵に對し鈴木、酒井兩部隊は朝來これを包圍して大砲機關銃の猛射を浴せ正午ごろつひにこれを潰滅四散せしめ、殘餘の兵は僅かに長辛店方面に潰走した模様である。



我軍の占領した大沽 (△印は砲台)

再び通州を爆撃

▲駐屯軍司令部午前七時半發表—通州のわが守備隊を攻撃中の敵は冀東保安隊の第一、第二部隊の襲撃たるもの、如くわが増援隊は目下同地に急行中なり。

▲四午後九時半發表—通州方面の敵に對しては二十九日夕刻わが飛行機出動し掃蕩を加へたり。該敵はその後砲撃を中止し通州北方の砲臺附近に集結し固れり。本日わが飛行機は再び該敵を掃蕩せり、わが増援隊は今夕通州に達せるもの、如し。

▲午後九時半發表—昨二十九日以來行方不明にて生死の程を憂慮せられてゐた冀東政府長官殷汝耕氏は某所に健在なり。情報によると殷長官はわが軍の手に救出され三十日午後六時半某所に到着したが何らの負傷もなく健在であつたといふ。

河邊部隊長辛店占領

▲駐屯軍司令部午後九時半發表—河邊部隊は本日午後三時長辛店およびその付近高地を占領せり。

敵兵三千の武装解除 この日午後三時、北平市内梅檀寺兵營において逃げおくれた支那兵三千名の武装解除を行つた。右は二十六日夕陽空門においてわが軍に對し城門をとぎして抜撃を企てた部隊である。

北平治安維持會生る

北平治安維持會は本日全員召集して發會式を挙げ引續き第二回協議會を開いたが委員は市政府各局長、商總會、銀行公會、新聞界、有力自治團體ならびに在野の名士よりそれと六名總計四十名より成り、委員長には江朝宗、委員には徐家驊、呂均ら六名が推され、北支文明化への第一歩を踏み出す事となつた。

七月三十一日

今朝五時過ぎからわが高木部隊は天津總站方面に進出し公大第七廠(鐘紡の天津における第二工場)で總站の東方)付近に暴食支那軍に猛烈な砲撃を加へて大打撃を與へたが、本日止午までに掃蕩を完了したものは日本租界に隣接する三不管二帯、東馬路から白河岸にわたる官南、官北二帯、東站を中心とする付近二帯、特別第二區(舊オーストリア租界)方面などであつて、引續き他の方面に掃蕩する支那兵および抗日不逞分子の掃蕩をつとけてゐる。

通州兵變の犠牲

▲駐屯軍司令部午前八時十分發表—奈良部隊は昨三十日午前十時四十分五台寺(北平西北方約四

（中）に於て叛亂したる冀東保安隊約三百と衝突しこれを撃破せり、敵の遺棄死傷は約百五十にして小銃九十、機關銃十一を虜獲せり。
本兵營に收容されて健在なるもの五十名、他は不明である。叛亂後断水した水道は漸く回復給水したが電燈はまだ點つてゐない。わが軍の到着により通州から潰走した叛亂保安隊數千は北平安定門、德勝門城外に集合して全く戦意を失つてゐるが、隊長の失踪で四分五裂となり現在まで武装を解除されたもの一千名に達してゐる。

▲午前九時陸軍省電「天津よりの情報によれば叛亂保安隊に撃破された通州方面の状況は左の如し

一、通州守備隊は在留邦人六十名を救助し得たり、その他の在留民は目下捜索中。

一、特務機關長細木中佐は今は生死不明、特務機關員は甲斐少佐以下七名戦死、通州守備隊は五十名戦死、七名の戦傷者を出した。

冀東長官代理に池宗墨氏就任 叛亂保安隊のために拉致された冀東防共自治政府長官殷汝耕氏はその職務を遂行する事能はざるに至つたので三十一日秘書長池宗墨氏が長官代理に就任する事に決定した。

【陸軍省許可通】三十一日基所着電によれば殷汝耕氏は保安隊第一總隊のために北平西方の門頭溝に拉致されたとの説がある。

旅客列車顛覆の慘

この日、去る二十九日午前車城と塘沽間で鐵道のレールを支那軍が取はつてあつたため通常旅客列車が顛覆し内外人六十五名の死傷者を出したといふ入電があつた。

我飛行機保定爆撃

平津地方におけるわが作戦は勇猛果敢なる皇軍の疾風迅雷的活躍によつて豫期以上の成果を取めたが、戦線はさらに南方に進展し平漢線保定方面には中央軍が續々北上しつゝありとの情報があつたので、その實情を偵察すべくわが飛行機は三十日午後保定上空に達したところ敵の一個列車を発見したので直ちにこれに爆撃を加へた、そのため保定は火災を起し少からの損害を蒙へた模様であつた。なほ三十一日朝までの諸情報と綜合すると、わが河邊部隊の長辛店追撃により敵は良郷以南に敗走また津浦線方面では第三十八師副師長李文田、同師百十二旅旅長董綱、獨立第三十二旅旅長李致遠らはいづれも残兵をまとめて馬廠（天津西南方）方面に向つて退却したとの事である。

國民政府抗日軍事の大權を蔣介石に一任

南京國民政府はこの日首脳部會議を開き協議の結果抗日軍事に關する大權を蔣介石に一任する決議を議場一致で可決した。而して黨務については任兆銘を最高責任者とする事を決定したが、國民政府としては黨、政、軍の三機關に對して全面的に戰時體制を實施しいよいよ對日抗戰の決意を表明したものと見られる。

兩日の我軍損害

▲陸軍省午後四時十分發表「廿八、九兩日の戰闘におけるわが戦死傷者中目下判明せる者左の如くである。

▲廿八日（沙河鎮）戦死一一△戦傷二二（清河鎮）戦死四〇△戦傷一一四（南苑及び蘆溝橋）戦死一八△戦傷四〇▲廿九日（天津付近）

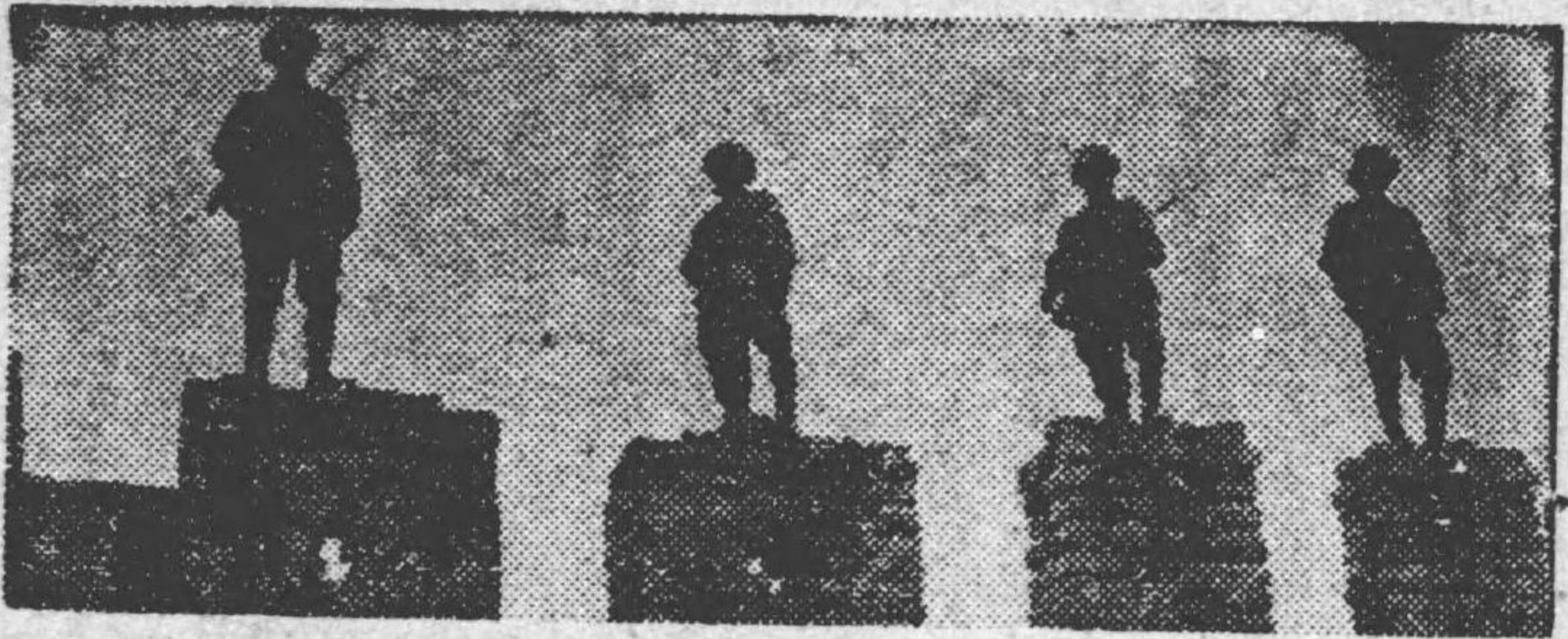
戦死九△戦傷二二

すなはち兩日の戰闘においてわが軍は戦死七十八、戦傷百九十七、總計二百七十五名の犠牲者を出した。なほこの外にも死傷者は相當ある見込みで目下調査中なり。また支那軍の損害は少くもわれに數倍乃至十數倍あるものと見られる。

天津の掃蕩成り、通州を確保

八月一日

わが飛行機の爆撃と相俟つて猛烈な市街戦を演じた天津市内の敗殘兵ならびに抗日便衣隊その他の兇惡分子は、わが軍の清掃工作によつて漸次その姿を消し卅一日中に大體掃蕩しつくされたものゝ如く、一般住民は戦禍をまぬがれてほつとしたやうである。かくて天津在留の元國務總理高凌霨を首班とする天津治安維持會はこの日發會式を舉行、すでに復活した公安局を實行班としてこれに世界紅十字會が協力しまつその第一着手として罹災民に衣類給與、施粥をなすと共に延焼しつゝある市街の消防ならびに各所に設置されてある敗殘兵の死體の始末、流言蜚語の取締り、公有財産の管理、郵便局の復活など各般にわたつて目ざましき戰後事業を開始する事になつた。なほ同會委員長には高凌霨自ら就任して九名の委員を選考、二日任命と共に初委員會を開くはすであるが委員の顔ぶれは次の如くである△副委員長劉紹瑛△委員王耀岩、王竹林、邱玉堂、趙紹周、劉玉書、孫道宇、紐德善、方若、沈月牛、



第一九号上より撮影

叛亂と共になが通州部隊を攻撃した冀東第一、第二保安部隊はその後わが軍の猛襲によつて多大の損害を蒙り、残余の部隊は北平付近においてわが軍のために武装を解除され同保安隊は事實上全く潰滅するに至つた。かくて通州は完全にわが軍の確保するところとなつたのである。情報によれば通州に留民約三百八十名中生存確実なるものは八十五名でいづれもわが守備隊に保護されてゐるとの事である。

蒋介石、韓に方策を授く

中央軍の最前線部隊は三十日からすでに参戦せる車明白となつた。係連中隊下の第三十、第三十一、第三十二の各師は三十一日涿州、定興に集結し一部は滹陽河の第一線にあつて第二十九軍と協力してわが軍の空襲に應戦、保定以北にはさらに中央軍の大部隊集結を待つて逐次平漢線を中心に左右兩翼に展開、易水南岸に陣地を構築中であると傳へられる。なほ南京來電によれば山東省主席韓復榘は一日朝突如濟南から南京に到着、午前九時馮玉祥と協議した後同十一時蒋介石と會見、山東の警備および北支時局について重要協議を遂げたが蒋介石は長期抵抗の決意を示して韓を激勵したのち對日作戰について種々の方策を授けた。その結果韓復榘は歸任後修養線ならびに青島の防備を擔當し津浦線方面は擧げて中央軍に委ねる事となつた模様である。

郎坊の支那軍兵營を根本的に破壊

八月二日

▲駐屯司令部午後二時發表—給木部隊は昨日午後八時ごろより北苑にある獨立第三十九旅(兵員三千二百)の武装解除を實施せり、同所における擄収兵器次の如し「小銃三千二百、輕機銃二百三十一、迫撃砲十一、山砲四、彈藥無數」南苑の敵陣における敵の遺棄死體数は二千を下らず、支那軍の擄収によれば五千といふ、捕虜百名、同敵陣

におけるわが軍の擄収兵器次の如し「野砲四、飛行機二機、軍馬一千頭、その他兵器彈藥多數」

▲同年九時發表—七月二十五日以来敵回にわたり支那軍不法不信行爲の根據地として利用されたる郎坊の支那軍兵營は昨日わが加藤部隊により根本的に破壊せられ且つ敗殘の便衣隊およそ三十を掃蕩せり。

▲同年四時發表—天津市内の掃蕩は本日の特例第一區の掃蕩をもつて全部完了せり。擄収兵器次の如し「小銃およそ四千挺、重機銃百挺、小銃三萬挺、手榴彈五ト(一トン積トラック五台)その他在庫品無數」情報によると支那空軍は大舉北上の準備をしてゐることが判明した。また他の情報によると支那空軍は天津空襲の計畫をなすつゝありと傳へられるが二日朝敵の飛行機一機南方から飛來して直ちに飛び去つたので果して中央軍の飛行機なりや否や調査中である。

劉汝明の態度急變濟南の動搖

かねて平地泉大同付近に集結願を窺つてゐた中央軍第十三軍長湯恩伯の率ゐる大部隊は一日夕刻遂に張家口に侵入した。これがため今日まで洞ヶ峠をきめ込んでゐた察哈爾省主席劉汝明の態度は俄然急變して抗日の色彩濃厚となつたといはれる。またわが〇〇部隊が津浦、平漢兩線の敵伏襲撃の結果中央軍は續々北上して保定付近に集結し盛んに陣地を構築中である。以上の如く中央軍の北上が頻りに傳へられるので濟南在住支那人の動搖甚だしきものあり、要人の家族はもちろんで支那人は連日南方へ引揚げつゝあり市内は非常な混亂を呈してゐるが韓復榘が南京に赴き中央色を濃化して歸來した事は一層この不安を益め保護安民の鑛則を堅持して來た山東の平和も遂に最後の局面に到達したかの觀あり極度に緊張してゐるとの事である。

馮玉祥の御曹子も戦死

南苑の激戦から北平方面に逃れた第百三十二師長湯恩伯、廿九軍の修俊郭らの戦死したことはすでに記述したがさらにその後の調査により馮玉祥の息馮維國(三)や段祺瑞の孫段某らも戦死したことが本日判明した。この日北平、豊台間の鐵道線沿ひに列車の運轉を開始した。▲北平治安維持會は午後五時から協議會を開き、よく積極的活動を開始した。

南口方面の敵軍装甲車爆撃

八月三日

▲駐屯司令部午後二時半發表—中央軍第八十四師は張家口より南口方面に汽車輸送中なるが中富部隊は本日午後七時ごろ下花園付近において輸送中の列車を、また午前十時ごろ岔道城付近において支那軍装甲車を、ついで

林堡において軍用列車を襲撃せり、列車中に潜伏せるもの少からず多大の損害を與へたるものゝ如し、なほ秋田部隊は進行中の支那軍を撃退せる無差貨車および新保安において下車中の敵兵を攻撃し多大の損害を與へたり。

張自忠三十八師長を解任

張自忠は第三十八師長を解任して軍籍を離脱する事となりその後任には李文田が任命された。▲天津治安維持會は本日午後委員會を開き宣言決議を發表▲冀東防共自治政府は通州事件發生のため一時北平に臨時辦事處を設け一切の公務を執る事となつた

陸相の通州事件報告

通州事件につき杉山陸相は二日衆議院でその後判明せる事情を説明したが三日さらに貴族院においてもその大要を説明した(別項参照)

八月四日

前日來平綏線により北平方面に向つて南下中であつた中央軍の第八十四師は張家口だけでも五個列車を敵へ張家口へ大損害を與へたが四日さらに昨日の爆撃を逃れて辛くも懷來、下花園兩驛に逃げ込んだ裝甲二個列車に第三回目の爆撃を敢行した、この攻撃により第八十四師の前進部隊は裝甲列車もろとも大損害を蒙り早くも立ちすくんだ模様である。

我軍への反撃作戦を練る

南京では何應欽、程潛、熊斌らを中心に連日作戰會議を開き保定を第一線とする反撃作戦を進めつゝあるものゝ如く、左の如き情報を接受した。

- 一、左翼山東方面は韓復榘との協定により中央軍系胡景翼軍を逐次海岸線、津浦線の兩路より山東に進入せしめ韓の第三路軍を第一線に中央軍を後方援隊として配備する。
- 一、保定以南平漢線に沿ふ石家莊、順德には乙種師團ではあるが過半数機械化部隊たる孫連仲軍を配して防備に當る。
- 一、西安事件に勇名を馳せた樊鍾甫は山西軍と協力して遠く山西、綏遠を迂回し既に察哈爾省にある湯恩伯軍と合流して西北方より日本軍の後方を脅威する。

他の情報によれば保定付近に集結せる中央軍内部に主戰論と和平論の硬軟相對立し蔣介石は收拾態度に苦慮しつゝありと傳へられる。

通州の犠牲者 通州兵變の犠牲者として本日まで判明せる生存者は内地人男子四十一名、女子二十四名、小兒二名、計七十七名、朝鮮人男子十五名、女子二十三名、小兒二十名、計五十八名、總計百三十五名である。

事變以來日支兩軍の損害數

八月五日

午前十時駐屯軍司令部は左の如く發表した

一、昨四日正午ころ良郷付近において岡崎部隊は機關銃を有する七八十名の敵と遭遇これを南方に潰走せしめた。敵の遺棄死體二十、南郷兵隊小銃二〇、手榴彈二〇〇個、我方に損害なし。

陸軍省電による事變勃發以來我軍が支那軍に與へた損害は左の如くであるがこの外になほ多大の損害ある模様である。

遺棄死體發見數

▲南苑行宮付近二千五百(第三十八師及び第百卅二師) ▲北平西方付近五百(冀東保安隊) ▲武裝解除數 ▲北苑三千二百(獨立三十九旅) ▲北平西方地區四千(第百三十二師) ▲通州一千(冀東保安隊) ▲捕虜 ▲南苑行宮付近二千(第三十八師及び第百三十二師)

陸軍省電による七月七日より八月三日正午までの我軍の戦死傷者數は左の如し

戦死 三百六十四名(内將校二十四、准士官以下三百四十) **戦傷** 八百六十九名(内將校五十九、准士官以下八百十) **計** 一千二百三十三名

なほ午後五時駐屯軍司令部發表による四日までの戦死傷者數は左の如し

川岸部隊 ▲戦死將校一二、准士官六、下士官一九、兵一三三 ▲戦傷死下士官一、兵六 ▲戦傷將校二五、准士官八、下士官二三、兵三三三

河邊部隊 ▲戦死將校四、准士官三、下士官一〇、兵六四 ▲戦傷將校一九、准士官二七、兵一五五

鈴木部隊 ▲戦死將校一、兵四一 ▲戦傷將校二、兵三 ▲戦傷將校七、兵二二七

酒井部隊 ▲戦死將校二、准士官一、下士官七、兵三〇 ▲戦傷將校九、准士官一、下士官一〇、兵一九

その他 ▲戦死將校三、下士官二、兵六 ▲戦傷准士官一、下士官三、兵七

合計 ▲戦死將校

准士官一〇、下士官三八、兵二七四、計三四四▲戰死傷將校二、下士官一、兵一六、計一九▲戰傷將校六〇、准士官一三、下士官六三、兵七三九、計八七五、▲戰死傷總數一、二三三八

南京政府部内に軟論漸く擡頭

前報の小廉状態と共に上海財界方面では「日本は外交を渉に入る用意があるのではないか」と稱するものがあるが、南京政府當局は「黄河までの懸念は大は不可避である、目下の情勢は支那側より和議を提出する時機ではない」との意向を洩らしてゐる。しかし我が艦隊ある防の目的としては、蔣介石が徹底的に對日抗戦を口にしなから裏面においては自ら精銳と稱する中央軍と日本軍との衝突を避け、維軍もしくは偽軍を第一線に立て、これが掃蕩を期してゐるといふ意圖が表面化して來たので、山東の韓復榘、山西の閻錫山らは蔣の肚を自抜いて無事に動かす、對日抗戦への参加を躊躇してゐる有様であり、殊に南京政府部内には漸く軟論が盛頭し硬軟兩論の對立抗手が激化する情勢を呈して來たので、蔣介石としてはこれが收拾に頗る苦慮しつゝありと傳へられるに至つた。

蔣介石、白崇禧兩巨頭の妥協

一方従來南京政府の一敵國をなしてゐた廣西側の白崇禧はこの日蔣介石と

蔣介石との歴史的會見を遂げ、難局打開について政治的折衝をなした。確言する中央、廣西の妥協條件の主なるものは

- 一、中央は積極抗日を即時執行すること
 - 一、廣西は中央が積極抗日策をとる限り絶対に中央を支持すること
 - 一、中央は廣西に對し抗日軍費としてまづ一千万円を支給すること
- 等である。而して廣西側としては右の妥協によつて中央に對する壓力を増加し、あはよくは蔣介石下野の囁には中原の鹿を白崇禧の手に取れんと目論見つゝあり、中央としてはまた對日開戦の場合後顧の憂ひを少くすると共に万日本に屈服することとなつた場合廣西にも一半の責任を負はしめてその態度を未然に防ぐと懸念されてゐる。

白を參謀總長起用説

なほ蔣介石は異國一致の實を示すため多年の政敵白崇禧を參謀總長に起用して中央軍作戦の指揮に當

させしめ現參謀總長程潛に代らしめる決意をなしたと傳へられる。

北支明朗化の曙光現はる！

八月六日

皇軍の斷平たる自衛行動によつて暴民なる支那軍を驅逐した後の平津地方には、早くも明朗な自治政權確立の曙光が現はれはじめたのは最も注目し得るところである。すなはちさきに第三十八師長を辭任した張自忠はさらに冀察政務委員會委員長代理をも辭任したので、同委員會は委員長制を廢し常務委員齊燮元、賈德彝、李思浩、張允榮、張慶の五名によつて合議制を設け、負責處理する事となつたが、常務委員齊燮元は同盟記者の質問に對して「東亞の安定は日本と提携する以外にないことは万人の知るところである。自分は親日反蔣及び國民黨反對を根本方針としてゐる。故に今後委員會が斷然南京との關係を斷つてこそはじめて北支の民衆が救はれるものと信じてゐる」と語つたのは、たとひ個人的意見に過ぎないとしても、今後の推移に大きな示唆を含むものと見られるのである。一方民衆の要望を敷衍して冀察地方參議會の準備が進められ近く第一回參議會召集の運びとなつたが、その指導目標は(一)南軍の北來反對(二)陸軍自衛(三)戰爭の繼續から北支を守れ、といふにあり、新參議會結成後これを中外に宣明される模様である。またさきに成立した天津治安維持會では高俊爵を委員長とし委員には王竹林、王曉岩、張炳光(譯音)張子卿(譯音)劉玉書、孫鴻宇、方若、沈月午、鈕傳善、邱玉堂、秘書長に劉紹現、總務局長孫鴻宇、公安局長劉玉書、財務局長張子卿(譯音)社會局長王竹林、衛生局長高生文(譯音)の陣容を決定し、さらに金融對策委員會並に物資對策委員會等を設立して本格的活動を開始する事となつたのは最も注目すべき現象である。

戒台寺の敗殘兵捕虜

兵三十を捕虜とせり

▲駐屯軍司令部午前十時發表一南軍部隊は八月四日夕刻戒台寺(長辛店南方三支里)を攻撃し敗殘

通州叛亂兵は五千八百

通州事件を惹起した冀東保安隊の叛亂部隊は教導總隊幹部養成所員一千三百、第一師團二千、第三師團二千、警備大隊五百で總計五千八百の多數であつた。

平津の鐵道復舊 北平では五日日本軍が各城門を占據すると共に開閉したが出入者を嚴重に監視してゐる。また天津事件後不通となつてゐた天津、北平間の鐵道は正午開通した。

南京國防會議即戦と自重の兩論對立す

南京國民政府ではこの日午後二時から全國國防會議第一日を開いた。出席者は蔣介石、何應欽、馮玉祥、居正（中央側）、閻錫山、白崇禧、余漢謀、何成濬、朱良黃、黃紹雄、熊式輝（地方側）この外汪兆銘、王寵惠らも加はり對日開戦について討議した結果「支那はすでに最後の關頭に立ち對日開戦は不可避なり」といふ意見に一致した。かくて戰略問題に入るや馮玉祥は「北支五省は危險に瀕し事態最早や猶豫を許さず、死生存亡の關頭に立つて戦はぬは斷じて生存を求めざるべし」として日支全面的開戦論を主張したが何應欽、何成濬らは「應戦やむを得ずとするも開戦は機を見てなすべきなり」との自重論を述べ、蔣介石直系と馮玉祥及び地方勢力との間に意見對立した。この間蔣介石は一言半句も發せず、悲痛な面持ちで沈黙したまま午後六時すぎ散會したと傳へられる。

南京邦人引揚げ

南京在留邦人は時局にかんがみて婦女子をはじめ續々引揚げつゝあるが、一般支那民衆も日支開戦直しの豫想から各方面へ避難をはじめ混雜を呈してゐる。

漢口も緊張

漢口方面の形勢も俄然緊迫し海軍省へ次の如き公電が到着した（一）昨日（五日）來當地の情勢頗る緊張を加へ陸戦隊は居留民保護に万端の手配を進めてゐる（二）日本租界を包圍せる體勢にある支那側は五日夜來その勢力を増加し陣地の構築を進めつゝあり（三）五日夜支那側は日本租界との交通を遮斷しかつ市内電話を不通とせり。

情報によると日本租界を包圍せる支那軍は要所々々にトーチカを構築してこれを據點とし、その數一万に上り日本陸戦隊との距離僅かに二十メートルの所もあるといふ。在留邦人は危險のため全部引揚げることとなり準備に忙殺されてゐる。

胡適、蔣の顧問となる

北京大學教授胡適は蔣介石に懇望され個人特別顧問として南京に留まる事となつた。

通州兵變の概要

貴族院における
杉山陸相の報告

通州保安隊叛亂の顛末については前述の如く二日の衆議院、三日の貴族院において杉山陸相からそれと説明報告をなしたが貴族院における陸相の説明要旨を左に掲げる。

七月廿九日午前三時すぎわが通州部隊は突如叛亂せる冀東保安隊の襲撃を受け直ちにこれに應戦した、敵はその兵力少くとも約二千名で、午前十時頃よりわが兵營周圍の土塀に據り砲兵迫撃砲等を増加しその射撃益々猛烈となり兵舎も一部は破壊せらるゝに至つた、然し我が守備隊はこれに屈することなくよく士氣旺盛交戦を續け傭人まで銃をとつて應戦した、正午稍過ぎ構内に集積してあつたガソリンに敵の迫撃砲弾が命中して火を發した第一線に送るべき銃砲弾を積載したる自動車にも敵砲弾が命中して十七輛を全部焼失し銃砲弾の自爆が約三時間にも亘つた、軍司令官は直ちに飛行隊を救援に出動せしめたのである、敵はこの爆撃により一時沈黙したが夜に入つても依然射撃を繼續し我が守備隊は激戦しつゝ夜を徹した、よつて河邊部隊より宣島部隊を引抜き通

州救援に急行せしめた、次いで實施された我が飛行隊の爆撃の甚大な効果により兵營周圍の敵は逐次退却し始めたのである、更に宣島部隊が三十日午後四時二十分到着して殘敵を攻撃して市内の掃蕩を行ひ漸くにして各城門を占領した。

その後飛行機にて通州に赴きたる軍幕僚の報告により概ねその真相が判明した次第であるが、右によればわが居留民は市内の各所に散在してをり事變勃發まで何らその兆候が見られなかつたため各自宅にゐたため敵の撞に襲撃するところとなり多數被害されたものやうで、中にはよく敵の眼を避れて守備隊に辿りつくものもあつた、敵はわが居留民に對し言語に絶する暴虐なる行動を取つてその大部分を城門外に拉致して殺した、その殘忍なる行爲は眞に耳目を覆はしむるものがある、二日迄に收容した居留民は内地人男四十名、女二十名、小兒十一名、朝鮮人男十四名、女二十一十一名、小兒十八名、合計百廿四名であつて發見收容したる死體

敵は約百三十である。なほ残りのものは行方未だ不明である。

◇
我が特務機關は二十九日午前三時頃敵の襲撃を受けたので細木機關長は冀東保安隊を自ら慰撫調整せんとして冀東政府に赴く途中西城前に於て悲壯なる戦死を遂げた。また特務機關員一同は甲斐少佐指揮の下に防戦につとめたが衆寡敵せずその大部分は遂に壯烈なる戦死を遂ぐるにいたつた。なほ守備隊その他の死傷は戦死十八名、負傷十九名である。目下通州においては我が軍により治安の維持は確實となり引續き行方不明の居留民を捜索中である。本事件は股女耕のもつとも信賴してゐた教導總隊が支那軍の煽動に防惑され第一、第二總隊の一部をも誘引して惹起したる兵變で全く豫測しなかつたところである。またこの事件が第二十九軍の計画的暴舉なることは廿八日夜の天津における夜襲と同じ日に起つたことでも明瞭である。冀東保安隊は三十日逃走して第廿九軍に合せんとしたがわが軍は北平北方においてこれを攻撃し約一千名を武装解除した。しかしながら無辜なる多数の同胞が暴民殘虐なる支那兵の手にかかり悲惨なる最期を遂げるに至つたことは洵に殘念至極で、私の最も遺憾とするところである。この度犠牲になられた方々に對し衷心哀悼の意を表する次第である。

昭和十二年八月十三日印刷
昭和十二年八月十五日發行

定價金五錢

編者 名古屋市西區御幸本町二丁目二十四番地
新愛知新聞社調査部

印刷兼 發行人 福永祖恭

發行所 名古屋市西區御幸本町通二丁目廿四番地

發行所 會社 新々社

電話本局二六五〇番
振替名古屋一三八九番

375
795

昭和十二年六月十五日發行

印

永組 恭

發行所

名古屋市中區
御幸町一丁目二四

新

社

定價金五錢

終